巴金のアナーキズム思想とサッコ・ヴァンゼッティ事件への関心

近藤　光雄

Anarchist philosophy of Ba Jin and his interest in the case of Sacco and Vanzetti

KONDO Mitsuo

萨凡事件（the case of Sacco and Vanzetti）是一九二〇年五月发生在美国的一起冤案。当时，马萨诸塞州发生了两起现金抢劫凶杀案，案发不久，警方无端逮捕了萨珂与凡宰特两位意大利无政府主义者。经审判，萨凡二人被判定杀人凶手，并于一九二七年四月被判处死刑，八月末被处以极刑。

几年前，笔者曾就巴金如何关注萨凡事件进行过一系列的思考，并发表了一篇论文，题为《试论巴金如何关注萨凡事件》（陈思和、李存光主编《你是谁——巴金研究集刊卷八》，上海三联书店，二〇一三年九月，四五五—四八二页）。笔者认为：萨凡二人被判处死刑后，中国一部分无政府主义组织通过言论、示威游行、援救活动等方式积极关注萨凡事件，表现了他们的人道主义与正义感；而在萨凡二人死后，他们在抗议死刑的名目下，主动展开了一系列的无政府主义宣传活动，由此将扩展无政府主义组织的规模以及其运动的势力。然而，巴金却与此相反。他在关注萨凡事件的过程中，尤其是在萨凡二人死后，是通过违背或摆脱当时他所信仰的无政府主义思想来主持人道与正义的。不仅如此，这一思想转变过程在当时巴金正在创作的《灭亡》（一九二九年）的故事情节中也得以展现；同时，巴金对人道与正义的提倡又直接决定了建国后他对《萨柯和樊塞蒂的受难》（*The Passion of Sacco and Vanzetti*, 1953）的作者法斯特（Howard Fast, 1914－2003）的拥护。

通过以上的讨论，笔者作出的结论是：摆脱某种理想与主义或抛弃纯粹的思想，突出人道与正义等个人情感，构成了巴金关注萨凡事件的独特性。尽管如此，笔者未能具体分析当时巴金所信仰的无政府主义以及他所坚守的革命思想都具有哪些特征。鉴于此，本文将在整理萨凡事件的经过、概括中国无政府主义者对萨凡事件的反响的同时，进一步深入讨论巴金的无政府主义思想是否曾给他对萨凡事件的关注带来决定性影响，由此重新阐释巴金如何关注萨凡事件。

はじめに

サッコ・ヴァンゼッティ事件は「赤狩り」（Red Scare）旋風が吹き荒れる一九二〇年代のアメリカで発生した冤罪事件である。一九二七年五月、フランス留学中に滞在先のパリで事件に接した巴金（一九〇四－二〇〇五）は、ヴァンゼッティとの文通、事件の経緯の紹介、ヴァンゼッティの自伝や書簡の翻訳など、様々な形式を通して事件に関心を寄せた。中国現代文学作家のなかで、巴金ほどこの事件に強い関心を寄せた者はいないだろう。事件に対する巴金の関心は学界では早くから知られており、今日の巴金研究においても、ヴァンゼッティのアナーキズム思想が巴金の思想形成に大きな影響を与えていることが一般的に認められている[1]。なかでも山口守は、巴金は事件に関心を寄せるなかで、異郷での生活に覚えた孤独感を慰め、世界と自分とを繋ぐ絆の存在を確認することができたばかりでなく、アナーキズムの理想のために献身すら厭わないヴァンゼッティの姿に強く惹かれたと評価した[2]。また艾暁明によれば、上海クーデター（一九二七年四月十二日）における階級闘争の酷さや国民党が繰り広げた共産党員や労働者への惨殺行為に驚愕した巴金は、正義感に駆られ本能的に被害者に同情を寄せたが、政党や国家の排除を唱えるアナーキズムの立場からそのような階級闘争を理解できずに理性と感情の矛盾に苛まれたとき、ヴァンゼッティにおける人類愛の概念によって心の調和を得ることができた。しかしながら、ヴァンゼッティが死の間際に敵であるブルジョアすらも愛し思いやるという寛容な態度は、巴金をしてヴァンゼッティの人類愛が観念的なものであることを悟らせたという[3]。

これらの先行研究において、巴金に対するヴァンゼッティ個人の思想的影響が強調される傾向が強く、巴金が様々な形式を通して事件に関心を寄せる際、彼のアナーキズム思想のみならず外在的要素、社会的要因がどのように作用したか、ほとんど考察されていない。階級闘争に言及した艾暁明はいくらかその点に注目しているものの、巴金の思想に具体的に踏み込んで議論を展開するには至っていない。

以上のことに鑑み、本稿では、巴金がいかなる時代状況のなかで自らの思想を構築したか、そして彼の思想がサッコ・ヴァンゼッティ事件への関心の寄せ方をどのように左右したかについて考察する。第一章ではサッコ・ヴァンゼッティ事件の経緯を具体的に紹介し、第二章では事件に対する中国アナーキズム組織の反応を概括する。第三章では巴金を取り巻く現実状況、巴金の革命思

想の特徴、ヴァンゼッティとの文通の内容、『革命』週報への批判を分析する。一連の作業を通して、巴金におけるアナーキズム思想と事件に寄せる関心との関係性を明らかにする。

一、サッコ・ヴァンゼッティ事件の発生とその経過[4]

サッコ・ヴァンゼッティ事件は二つの現金強奪事件を契機に起こったものである。

一九一九年十二月二十四日、マサチューセッツ州はプリマス郡（Plymouth County）ブリッジウォーター（Bridgewater）で現金輸送車が襲われた。L・Q・ホワイト製靴会社（L. Q. White Shoe Company）の従業員の給料を積んだトラックが銀行から会社に向かう途中、散弾銃と拳銃を持った二人の男がトラックを目がけて発砲したのである。会社の護衛はこれに応戦し、運転手は路面電車を盾にしながらトラックを走らせたが、トラックは電柱に衝突し小破した。しかし、強盗犯グループ（計四人）が発砲後に自動車で逃走したため、現金輸送車襲撃事件は死傷者を出すことなく未遂に終わった（以下、ブリッジウォーター事件）。

翌一九二〇年四月十五日、マサチューセッツ州はノーフォーク郡（Norfolk County）サウスブレーントリー（South Braintree）で強盗殺人事件が起きた。スレーター・アンド・モリル製靴会社（Slater and Morrill Shoe Factory）の会計係パーメンター（Frederick A. Parmenter）と警備員ベラルデリ（Alessandro Berardelli）が、従業員の給料を会社事務所から二百メートルほど離れた工場に運ぶ最中に襲われたのである。彼らが工場に差し掛かる頃、一人の男がベラルデリに近づき発砲し、ベラルデリは四発の銃弾を受け数分後に亡くなった。逃げるパーメンターも追ってきた男の発砲した銃弾を二発受け、十五時間後に亡くなった。強盗犯グループ（計五人）は現金を奪って、自動車で逃走した（以下、サウスブレーントリー事件）。

二日後の四月十七日、サウスブレーントリー事件の目撃者数人から、強盗犯グループの使用した自動車がビュイックであるとの証言が得られた。同じ日、殺人現場から南に二十キロほど離れた、ウエストブリッジウォーターに近い森のなかから、乗り捨てられたと見られるビュイックが発見された。それは、一九一九年十二月二十二日にニーダム（Needham、サウスブレーントリーから北西に二十キロほど離れた町）で盗まれた自動車であった。警察はこれをサ

ウスブレーントリー事件の強盗犯グループが逃走に使用したものと認定した。

州警察は、この二つの事件を職業的な犯罪者によるものと見て、捜査に乗り出した。有力な手掛かりを掴んだのは、ニュー・ベッドフォード（New Bedford、サウスブレーントリーから南に六十五キロほど離れた町）市警察のジェイコブス警部であった。彼は、サウスブレーントリー事件が起こる数日前に、評判の悪いマイク・モレリ（Mike Morelli）がビュイックに乗っているところを目撃していたのである。マイク・モレリはモレリ五兄弟の一人で、兄弟のうちの三人が貨車を荒し盗品を売り捌いた罪で裁判にかけられていた。その裁判費用を捻出するため現金強盗を働く可能性があったことから、警部は、サウスブレーントリー事件はモレリ一味による犯行ではないかと疑った。しかしながら、一九二〇年五月にサッコとヴァンゼッティが両事件の容疑者として逮捕されると、モレリ一味の捜査は打ち切られた。サッコとヴァンゼッティはなぜ逮捕されたのだろうか。

アメリカでは、第一次世界大戦戦時中から戦後にかけて「赤狩り」旋風が吹き荒れた。一九一七年六月に「スパイ活動防止法」（Espionage Act of 1917）、一九一八年五月に「治安維持法」（Sedition Act of 1918）、同年十月に「国外追放法」（Immigration Act of 1918）が成立し、およそ反戦勢力と目された組織や個人は厳しく弾圧された。例えば、世界産業労働者組合（Industrial Workers of the World, IWW）の事務所やアメリカ社会党（Socialist Party of America）の本部は捜索を受け、数多くの組合委員や社会党幹部が起訴され、懲役刑に処された。一九一七年から一九一九年にかけてアメリカ各州でサンディカリスム取締法が相次いで成立し、IWWへの取り締まりがますます強化された。また、第一次世界大戦終結に伴い社会は経済不況に陥り、復員兵は就職できず失業者が急増した。とりわけ、一九一七年のロシア革命の影響により世界各地で労働者運動が高まりを見せると、一九一九年一月にはニューヨークの港湾労働者と織工がストライキを敢行し、九月にはボストン市の警察官がストライキに立ち上がり、同月から年末にかけて三十六万人の鉄鋼労働者によるストライキが三カ月余り続けられた。そればかりでなく、同年四月から著名人宛てに爆弾小包が送られるようになり、六月二日には司法長官パーマー（Alexander Mitchell Palmer, 一八七二－一九三六）の自宅で爆弾小包が爆発した。こうしたなか、司法省はアナーキズムを信奉する外国人の国外追放を定めた「国外追放法」を武器に、同年十一月にロシア人アナーキストを逮捕、強制送還し、司法長官パーマーは一九二〇年一月にアメリカ全土において一斉検

挙を実施し、多くのアナーキストを逮捕し国外に追放した。サッコとヴァンゼッティの住むマサチューセッツ州でも「赤狩り」の手入れが行なわれ、二人が逮捕された五月はそのピークに達していた。

両事件の容疑者として逮捕されたサッコとヴァンゼッティは、ともにイタリアからの移民であった。

バルトロメオ・ヴァンゼッティ（Bartolomeo Vanzetti, 一八八八－一九二七）は、イタリア北部の大都市トリノの南部にあるクーネオ県（Provincia di Cuneo）ヴィラファレット（Villafalletto）の農民の家に生まれた。十三歳まで学校に通った後、彼は菓子屋に丁稚奉公に出され、また製パン所の徒弟として働いた。しかし、過酷な肉体労働によって体を壊したため、ヴァンゼッティは四年後に家に戻った。その頃、母親が癌を患い、間もなく亡くなった。彼は父親がアメリカで生活していたことを思い出し、一九〇八年六月にアメリカに渡った。ニューヨークに着くと、ヴァンゼッティはレストランの皿洗いの仕事を八カ月間続けた。その後、コネチカット州はハートフォード（Hartford）、グラストンベリー（Glastonbury）、ミドルタウン（Middletown）の各地を転々とし、マサチューセッツ州はスプリングフィールド（Springfield）の煉瓦工場で十カ月間働いた。やがて彼は、コネチカット州はメリデン（Meriden）に移り、石切り工として二年間働いた。それから、友人の紹介でニューヨークのホテルでシェフの下働きとして一年ほど働き、間もなく左官として、スプリングフィールド近郊の収容所やマサチューセッツ州はウースター（Worcester）近郊の収容所で計一年ほど働いた。一九一四年からは、同州のプリマスにある索条（船舶用の縄）工場で働き始めた。一九一六年一月、索条工場で賃金引き上げを求めるストライキが発生すると、ヴァンゼッティは直接行動を訴えるアナーキストとともに立ち上がりこれを支持した。そしてストライキが敗北に終わると、彼は工場から解雇された。プリマス地方の雇用者たちのブラックリストに彼の名が載ったため、彼は職を転々と変えざるを得なかった。一九一七年五月、第一次世界大戦に参戦したアメリカで徴兵法が成立すると、ヴァンゼッティは翌月の徴兵を逃れるべく同月下旬にメキシコに渡った。同年九月にアメリカに戻ると、ミズーリ州はセントルイス（St. Louis）やオハイオ州はヤングスタウン（Youngstown）などを転々とし、翌一九一八年夏にプリマスに戻った。そして翌一九一九年春から、イタリア人を相手に魚の行商で生計を立てるようになった。

ニコラ・サッコ（Nicola Sacco, 一八九一－一九二七）はイタリア南東部に

位置するプッリャ州（Regione Puglia）フォッジャ県（Provincia di Foggia）トッレマッジョーレ（Torremaggiore）の中流の家庭に生まれた。十七歳の時、彼は自由な国に憧れを抱き、兄とともにアメリカに渡った。兄は間もなく帰国したが、サッコは道路工夫として働き、翌一九〇九年にはマサチューセッツ州はホープデール（Hopedale）の鉄工所に勤めた。一九一〇年から一九一七年にかけて、彼は同州のミルフォード（Milford）を中心にいくつかの靴工場で働き、やがて熟練工となった。この間、一九一三年にホープデールの機械工場の労働者がストライキを敢行した際、サッコは靴職人でありながら同情ストを決行し、オルガナイザーとして高く評価された。また、一九一六年にはミネソタ州のストライキを支援しデモ行進を組織するが、平和を乱した廉で逮捕された。一九一七年五月下旬、サッコは徴兵を逃れる目的でイタリア人平和主義者のグループとともにメキシコに渡り、その一員であるヴァンゼッティと親交を深めた。同年九月にアメリカに戻ると、マサチューセッツ州はストートン（Stoughton）にある３－Ｋ靴工場（３－K Shoe Factory）で働き始めた。彼はまた、スレーター・アンド・モリル製靴会社の工場に隣接するライス・アンド・ハチンズ靴工場（Rice and Hutchins Shoe Company）に数日勤めたこともあった。

サッコとヴァンゼッティはともにアナーキズムを信奉し、イタリア人アナーキストであるルイジ・ガレアニ（Luigi Galleani, 一八六一－一九三一）の指導するグループに所属していた。彼らは機関紙を配布するほか、戦時中から戦後にかけて、「赤狩り」の犠牲者の救援活動に加わっていた。例えば、一九二〇年二月に、イタリア人アナーキストのサルセード（Andrea Salsedo, 一八八一－一九二〇）らが前年六月の司法長官宅爆弾事件の容疑者として逮捕された際にも、彼らはその救援活動に積極的に携わっていた。これに関連して、彼らは四月末に、ニューヨークの「イタリア人労働者救援委員会」の弁護士からアナーキズム関連の文書を隠すよう忠告された。その直後の五月三日の朝、サルセードは司法省ビルの十四階から転落し不可解な死を遂げた。彼らはアナーキストのボーダ（Mike Boda）の所有する自動車で関連の文書を運び出すために、五日の夜にボーダ、オルチアニ（Carlo Orciani）とともにウエストブリッジウォーターにある修理業者ジョンソン（Simon E. Johnson）のところに自動車を受け取りに来た。しかし、一九二〇年のナンバー・プレートが付いていないことから引き渡しを拒否された。ボーダらと別れて帰宅する途中、サッコとヴァンゼッティは電車のなかで逮捕され、隣町ブロックトン（Brockton）の警察

署に連行された。ブリッジウォーター事件が起こってから、ブリッジウォーター警察署長のスチュアート（Michael E. Stewart）は、ボーダと彼の自動車に疑いを抱き、受け取りに来る者が現れたらブロックトン警察に連絡するようジョンソンに命じていた。サッコとヴァンゼッティが逮捕されたのも、ジョンソンの妻が警察に通報したからである。パーマーの手入れに加わったことのあるスチュアートは、「両事件の犯人は赤の外国人」に違いないとの先入観から、偶然逮捕されたサッコとヴァンゼッティを両事件の犯人と断定したのである。

スチュアートの告発を受け、一九二〇年六月十一日にヴァンゼッティは起訴され、同月二十二日にブリッジウォーター事件をめぐる裁判がプリマスで開かれた。この裁判において、トラックに同乗していた会社の護衛と会計係、現場を通りかかった自動車修理工場の従業員の三人の証言が有力なものとされた。この三人は、ブリッジウォーター事件が発生した翌日に、ピンカートン探偵事務所（Pinkerton National Detective Agency）による事情聴取に応じていた。その際、護衛と会計係は散弾銃を発砲した男が短く刈り込んだ口ひげを生やしていたと述べ、修理工場の従業員は散弾銃を発砲した男の顔をよく見ていないと話し、護衛と修理工場の従業員は強盗犯グループが逃走に使用した自動車はハドソンであると語った。しかし、法廷で行なわれた証言において、護衛と会計係は件の男がヴァンゼッティと同じくふさふさした長い口ひげを生やしていたように述べ、修理工場の従業員はヴァンゼッティの容貌に似た犯人像を描き、護衛と修理工場の従業員は強盗犯グループがビュイックに乗って逃走したと話した。ピンカートン探偵事務所の聴取内容と法廷での証言が大きく食い違っているにもかかわらず、探偵事務所の作成した報告書が警察や検察関係者以外には公開されなかったため、弁護人側は三人の偽証を問うことはできなかった。一方のヴァンゼッティは、ブリッジウォーター事件の当日、早朝からプリマスで鰻を売っていた。それを見かけた者や彼から鰻を買った者が証言台に立ち、彼のアリバイを証明した。イタリア人には十二月二十四日に鰻を食べる習慣があったため、証人たちの記憶に誤りがあるとは考えられなかった。しかしながら、証人たちが英語を理解できず、通訳を介しても検察側の質問攻めにほとんど答えられなかったため、検察側は彼らの証言が信憑性に欠けると考えた。「赤狩り」旋風が引き起こしたアナーキストや外国人への偏見と、反体制的な人間を犯人に仕立て上げようとする検察側の思惑とが相俟って、同年八月十六日、ヴァンゼッティは十二年から十五年の不定期懲役刑を言い渡された。

これに続いて、サッコとヴァンゼッティは一九二〇年九月十一日にサウスブ

レーントリー事件の殺人容疑で起訴され、翌一九二一年五月三十一日にマサチューセッツ州はデッダム（Dedham）で裁判が開かれた。証言台に立った踏切番のレヴァンジー（Michael Levangie）は、逃走する強盗犯グループの自動車を運転していた人物がヴァンゼッティであると供述したが、ヴァンゼッティが車を運転できないことがすぐに判明した。犯行現場に近いライス・アンド・ハチンズ靴工場に勤めるルイス・ペルザー（Louis Pelser）は、窓から事件を目撃し、犯人の男がサッコに似ていると証言した。しかし彼の同僚たちは、銃声が響いたときペルザーは腰かけの下に潜り込んでいたと話した。また、窃盗の常習犯で当時保護観察中の身であったグッドリッジ（Carlos E. Goodridge）も、サッコが強盗犯グループの自動車に乗り込んでいたと語った。このほかにも物的証拠が提示され、例えばベラルデリの死体の近くに落ちていた帽子が、サッコが仕事場で被っていたものとされたが、サッコにはそれを使用した覚えはなかった。また、検死の結果ベラルデリに致命傷を負わせた一弾がサッコの所有する拳銃と同じタイプのものから発射されたことが判明したため、検察官と鑑定人は共謀して、サッコが犯人であることを印象づける訊問と応答を行なった。そればかりでなく、サッコとヴァンゼッティが逮捕されたときに拳銃を所持し、後の取り調べにおいて自らの行動について嘘の陳述を行なったことに「罪の意識」が現れているとされたのである。しかし、サッコとヴァンゼッティにはアリバイがあった。サッコが事件当日、帰国用のパスポートを入手するためボストンにあるイタリア領事館を訪れていたことを、領事館書記はしっかりと覚えていたのである。ヴァンゼッティについては、事件当日プリマスで彼から魚を買った労働者や、彼と長時間話をした漁夫など、計十一名の証人が彼のアリバイを証明した。それにもかかわらず、検察側はサッコへの尋問から政府転覆を図るアナーキストとしての人物像を引き出し、一連の「証拠」によって二人を凶悪犯に仕立てようとしたのである。こうして、一九二一年七月十四日、サッコは主犯、ヴァンゼッティは共犯として死刑を言い渡されたのである。

死刑判決が下された直後から、弁護団は独自に調査を行ない、新たな証拠の収集に当たった。そして一九二三年秋、デッダム裁判におけるサッコとヴァンゼッティに対する検察官および陪審員長の予断と偏見、ペルザーやグッドリッジらの証人の偽証、ベラルデリの致命弾がサッコの所有する拳銃から発砲されたものではないとする鑑定人の供述書に基づいて、裁判のやり直しを申し立てたが、翌一九二四年十月にセイヤー（Webster Thayer）裁判官に却下された。翌一九二五年十一月十八日、銀行強盗の殺人容疑者で逮捕されていたマデイロ

ス（Celestino F. Medeiros）がサッコに書簡を宛て、サウスブレーントリー事件への関与を認めたのである。調査に乗り出した弁護団はマデイロスの証言を取りつけ、彼がイタリア人ギャング団のモレリ兄弟を主犯とする強盗殺人事件に加担していたことや、ジョー・モレリ（Joe Morelli）がサッコの所有する拳銃と同じものでベラルデリに発砲したことなど、新たな証拠を掴んだ。マデイロスの供述をもとに弁護団は裁判のやり直しを再度申し立てたが、死刑を言い渡されていたマデイロスの供述は信憑性に欠けるとして、翌一九二六年十月にまたしてもセイヤー裁判官に却下された。その後、弁護団は州最高裁判所への上告手続きを取ったが、州最高裁判所が裁判官の却下を支持する判断を下したため、翌一九二七年四月九日、セイヤー裁判官はサッコとヴァンゼッティに対して同年七月の死刑執行を言い渡した。

ここに至って、国内外から州知事フラー（Alvan T. Fuller）のもとに寛大な措置を求める要請文が殺到し、ヴァンゼッティも彼に請願書を提出した。死刑執行日が八月十日に延期されることが決まると、フラーは六月一日に諮問委員会を設立し調査を行なった。しかし八月三日、彼は委員会の報告を受けて、裁判の公正性と死刑判決の妥当性を支持する立場を表明し、請願を拒否した。

この頃から、世界各地で救援活動や抗議集会が盛んに行なわれるようになり、ブエノスアイレス、ニューヨーク、フィラデルフィア、バルチモアなどでは爆弾騒動が発生し[5]、ブエノスアイレス、ニューヨーク、ロンドン、パリのみならず、フランス全土でも同情ストが展開された[6]。日本でも、関東黒色青年連盟、関東労働組合自由連合会などが加盟する国際弾圧防衛委員会の主催により、八月二十一日午後七時、築地小劇場で両氏の死刑反対演説会が開かれ、近藤憲二（一八九五－一九六九）、石川三四郎（一八七六－一九五六）ら三十余名の弁士が演説を行なう予定であった。しかし、警察の解散命令を受けて聴衆と警察が衝突し、関東黒色青年連盟のメンバー二十余名が検束された。また午後十時頃、演説会参加者は「死刑取消」の抗議書を携えてアメリカ大使館に押しかけたが、石川三四郎ら八名が検束された[7]。

これらの動きを受けて、フラーは死刑執行日を八月二十二日まで延期する声明を発表したが、抗議活動はますます激化した。二十二日、ドイツはハレ（Halle）で、数千人の民衆が両氏の死刑執行に対し同情示威運動を展開し、警察と衝突した[8]。ジュネーヴでも二十二日、両氏の死刑執行に抗議する約五千人の民衆がアメリカ人の経営する商店や銀行、ホテルなどを襲い、国際連盟本部も損害を被った[9]。

世界各地で抗議の嵐が巻き起こったが、それにもかかわらず、八月二十三日、マデイロス、サッコ、ヴァンゼッティは電気椅子で死刑に処された。

一九二八年一月、文筆家のベント（Silas Bent）とカラハン（Jack Callahan）は、サッコ・ヴァンゼッティ事件について独自の調査を進めた結果、ブリッジウォーター事件の真犯人を知っていると話す収監中のミード（Jimmie Mede）に接触することに成功した。ミードの回想によれば、シルバ（Frank Silva）という男が彼にブリッジウォーターでの強盗計画を持ちかけ、マルコ（San Marco）と三人で実行するはずであった。しかし、ミードはほかの事件で逮捕され、後にマルコも殺人罪で終身刑を言い渡された。二人とも同じ監獄に収監されたため、ミードはマルコから、マルコ、シルバ、オーツ（Oates）、ブルーノ（Doggy Bruno）の四人がブリッジウォーター事件の実行犯であると聞かされた。そこでカラハンは更にシルバの居場所を突き止め、彼を連れて現場検証を行なった。その結果、ブルーノが散弾銃を発砲した犯人であるとの証言が得られた。そして一九二八年十月三十一日、カラハンは一連の取材をまとめた記事を『アウトルック・アンド・インディペンデント』（*Outlook and Independent*）誌に発表した。その際、ブルーノの写真も掲載されたが、彼の顔はブリッジウォーター事件の主犯とされたヴァンゼッティのそれとは似ても似つかないものであった。

かくして、マデイロスやマルコ、シルバの証言により、ブリッジウォーター事件およびサウスブレーントリー事件の真犯人が明らかとなり、サッコとヴァンゼッティの冤罪はついに晴れたのである。そして、両氏の死から五十年もの歳月が流れた一九七七年七月十九日、マサチューセッツ州知事は、サッコ・ヴァンゼッティ事件を巡る裁判が不公正であったことを宣言した。両氏およびその家族らの汚名が漸く雪がれたのである。

二、サッコ・ヴァンゼッティ事件に対する中国アナーキズム組織の反応

サッコ・ヴァンゼッティ事件は当時の中国においてほとんど注目を集めることはなかった。アナーキストの間で反響を呼んだものの、それぞれ異なる色合いを帯びていた。

サッコ・ヴァンゼッティ事件に最も関心を寄せた中国アナーキズム組織は「中国少年アナーキスト連盟」（以下、連盟）であろう。連盟はサッコとヴァンゼッティが死刑に処される前から積極的に抗議活動を展開した。その経緯につ

いて、連盟は以下のように記している。

> アメリカはマサチューセッツ州で起きたイタリア人同志のサッコとヴァンゼッティの事件は、昨年〔一九二六年――引用者〕になって民鋒社の注目を集めた。一九二七年一月、各地の民鋒社が共同で連盟を成立させた。連盟はすぐにマサチューセッツ州知事フラーに抗議文を寄せ、更にボストンの擁護委員会経由で、サッコとヴァンゼッティの両氏にも慰問の手紙を宛てた。〔……〕
>
> 〔一九二七年〕七月になると、世界各地のアナーキストや労働者団体の憤りはますます高まりを見せ、サッコとヴァンゼッティの命はすでに危機に陥っていた。当時、本連盟はちょうど、内部においては運営上の改組を行なう必要があり、また外部においては本連盟の言論が上海の陳楊〔陳群（一八九〇－一九四五）、上海警備司令部軍法処処長。楊虎（一八八九－一九六六）、上海警備司令――引用者〕に恨まれていたため、大きな行動を取ることができず、『民鋒』月刊を出版することもできなかった。死刑執行猶予の知らせを受け、八月十二日、改組後の中国少年アナーキスト連盟は「第一次『為沙柯樊澈蒂同志事件』告全中国安那其主義者及革命的無産階級宣言」を発表し、北京のアメリカ大使館ならびに上海のアメリカ領事館に抗議文を寄せた[10]。

連盟は八月十二日に発表した「宣言」において、抗議活動の具体的な目的を明らかにしている。

> しかし、道理と正義、自由を重んじる中国の同胞は、いささかも心を動かされないのだろうか。本連盟はそう思わない。今や、各国のプロレタリアートの団結した抗議はすでにいくらかの成果を上げている。しかし、我々が求めるのは死刑の執行猶予ばかりではなく、サッコとヴァンゼッティの両氏の自由を無条件に回復することである。もうすぐ最後の勝利を手にするであろう。本連盟は中国の革命的な同胞が団結して援助に立ち上がることを願う！[11]

かくして連盟は、一九二六年頃からサッコ・ヴァンゼッティ事件に関心を寄せ、言論弾圧に遭いながらも救援活動に立ち上がったのであり、世界各国における抗議活動と同様に死刑判決に抗議し両氏の人権を擁護する姿勢を貫いたのである。そればかりでなく、連盟は、「抑圧されあらゆる自由を失っている」「革命

的なプロレタリアート」および「良心をすっかり失い」「金銭や権力」に溺れている「哀れな中国の知識階級」[12]が、事件に関心を寄せ、両氏が自由と平等を勝ち取るために積極的に救援活動に加わるよう呼びかけたのである。

中国のアナーキズム系定期刊行物のなかで、最も多くサッコ・ヴァンゼッティ事件を取り上げ、事件に対する中国アナーキストの反応を紹介したのは『革命』週報である。一九二七年八月初旬に『革命』週報に掲載された「轟動世界的凡薩案」のなかで、宗緑は死刑執行延期に至るまでの事件の経緯を大まかに概括し世界各国の抗議運動の様子を伝えたうえで、事件に無関心な中国の民衆に対して、正義のためにすべてを犠牲にする精神を掲げるよう呼びかけた[13]。宗緑は続けて「裁判官賽葉竟敢殺薩凡耶？」において、セイヤー裁判官がブルジョアと結託し階級の利益のために公然と殺人を犯そうとしていることを批判したほか、「パリサッコ・ヴァンゼッティ委員会」が一九二七年六月二十九日に州知事フラーに二百八十万人の署名を提出した際に寄せた抗議文を紹介し、正義と人道を求める声を中国に届けた[14]。

死刑判決を批判する言説が主流となるなか、一九二七年八月に『現代評論』に発表された「薩各樊才第事件」において、朋はサッコとヴァンゼッティを「イタリアの共産党員」と決めつけ、以下のように述べている。

> 〔……〕共産党を誅滅したければ、勇気を持って正々堂々と殺せばよい。関係のない事件を口実にする必要もなかろう。ここからも、アメリカの法曹界の腐敗ぶりを見て取ることができるのだ！　それから思うに、西洋人の命はさすがに値打ちがあり、取るに足らない共産党であっても、彼らの味方をして彼らに法律の保障を受けさせようとする人がいる。それに引き換え、張屠帥〔張作霖（一八七五－一九二八）――引用者〕が北京と天津で好き勝手に革命党を惨殺しているが、誰がこれに義憤を覚えたことがあろうか[15]。

朋の発言には、サッコとヴァンゼッティの人権と自由を擁護し死刑判決に抗議する直接的な言葉は見られない。しかしながら、両氏がアメリカ政府や法曹界から被った迫害に言及し、張作霖が行なっていた革命党への殺戮行為に触れるなかで、朋は革命家が権力者によって加えられた抑圧やそれに対する民衆の無反応・無感覚を批判しながら、ある種の正義、人道を標榜しようとしたのである。とはいえ、彼のスタンスはあまり明瞭なものではなかったため、両氏を共産党員と決めつけた発言が早速中国アナーキストの反論を招いた。

当時、サッコとヴァンゼッティが共産党員であると決めつけられたことは、アナーキストにとって看過され得るものではなかった。例えば民鋒社は、こうした状況に対して以下のような反応を示した。

〔……〕上海のブルジョア系の新聞各紙は、見識が浅く知識が乏しく、今日の国民が共産党に抱いている妬みや恨み、憤りを利用して、サッコとヴァンゼッティに寄せる同情を中傷し、両氏をともに共産党員と決めつけた。『現代評論』の記者もこれを踏まえて議論を進めた。そこで、連盟書記部は手紙を送り訂正を求めたほか、警告を与えた。〔……〕[16]

民鋒社に従えば、当時中国の民衆が共産党に反感を抱いていたため、両氏を共産党と決めつけるブルジョアの仕業は、民衆の言わば正義と人道の感情を傷つけるものであったという。宗緑も「轟動世界的凡薩案」のなかで同様の見解を述べている。彼によれば、資本家に買収されてしまったロイター社は、「共産党と無政府党の違いを見極めることができず、資本家を批判するのは共産党だけであると思っている」ため、良心に背いてわざと「両氏はイタリアの共産党員である」とのデマを飛ばしている。そればかりでなく、同社は、両氏を「世界中のプロレタリアートからの同情を失っている」共産党と決めつけることで、「両氏の援軍を絶とうとした」という[17]。かくして、民鋒社の新聞社への抗議と宗緑のロイター社への批判は、両氏がアナーキストであることを弁明するためのものであり、新聞各社の報道が民衆の誤解を招き共感を歪め、救援活動を衰退させることを防ぐためのものであった。

このことに関連して、宗緑は「裁判官賽葉竟敢殺薩凡耶？」の「付言」のなかで朋の発言に反論し、以下のように述べている。

この文章を書き終えた直後、友人が、『現代評論』にサッコ・ヴァンゼッティ事件を批評した短文が掲載されていると言ってきた。それによれば、サッコとヴァンゼッティはイタリアの共産党員であり、世界中の世論が共産党に同情を寄せるのはあまりにも無意味であると言わざるを得ない云々。私はあの作者には国際時事にしっかりと目を向けていただき、くれぐれも何の根拠もなしにむやみに批評を下さぬようお願いしたい。かりにサッコとヴァンゼッティが共産党員であるとしても、我々は両氏が共産党員であるからといって、あらゆる正義と人道の観念をすっかり忘れてしまってもよいわけでは

ない。況してや、彼らは共産党員ではないのだ。〔……〕[18]

宗緑はここにおいても、両氏が共産党員ではないことを明らかにし、救援活動を最優先すべきであるとのスタンスを堅持した。そして、自らの標榜する正義と人道は思想や信仰の違いを超えて、迫害を被ったすべての弱者に向けられるものでなければならないと考えたのである。

かくして、サッコ・ヴァンゼッティ事件に対する中国アナーキズム組織の反応とは、正義と人道のもとで救援活動を展開し、両氏の無罪を主張し、死刑判決を下した権力者を批判するものであった。それは、世界各国で行なわれていた抗議活動と同様の性格を持っていたと言えよう。

しかしながら、これらの反応はサッコとヴァンゼッティが死を遂げるまでのものである。両氏が亡くなった直後から、中国アナーキズム組織はこれまでとは異なる動きを見せるようになった。

例えば、一九二七年八月二十三日にサッコとヴァンゼッティが電気椅子で処刑されると、連盟はその後もしばらくの間抗議活動を続けた。その状況について連盟は以下のようにまとめている。

> その後、帝国主義、資本主義のアメリカの極悪非道な政府と法廷が、全世界の組織された労働大衆の抗議を受けつけないことを知ると、〔連盟は〕即座に可能な範囲で運動の準備に取り掛かり、アナーキストの力は侮るべきものではないことをアメリカの帝国主義者に知らしめ、我らが犠牲者の仇を討とうとした。そのため、すぐに「第二次宣言」を印刷し、併せて朝鮮黒幟団、上海Ａ連盟、武漢から来訪した同志と団結して、八月二十四日夜にそれぞれ南京路、愛多亜路、虹口、南市、閘北などで連盟の「第二次宣言」、および〔連盟が〕朝鮮黒幟団、上海Ａ連盟と共同で発行した英語のビラを散布した。〔……〕その後、我々は更により実際的な行動を計画したが、いずれも厳重な警備に遭い実現できなかった。まことに遺憾である！　二十七日と二十八日の夜、朝鮮黒幟団と共同でフランス租界の環龍路、呂班路一帯で朝鮮語の「告朝鮮民衆宣言」および英語のビラなどを散布した。それによって、資本主義、帝国主義国家であるアメリカの所謂法律は実際のところ特権階級が革命的なプロレタリアートに迫害を加えるための刀や鋸であること、所謂デモクラシーの政治もブルジョアの独裁にすぎないことを宣言しようとした[19]。

連盟の抗議活動は衰えるどころか、それまでの勢力を更に上回っていることが読み取れる。とはいえ、サッコとヴァンゼッティがすでに亡くなっていたため、連盟は、両氏を救助するという当初の目標を掲げる代わりに、朝鮮をはじめ上海や武漢の同志たちと連携し、帝国主義の権力者の執り行なう政治や、彼らの権力の行使を保障する法律に抗議し始めたのである。

そればかりでなく、連盟は一連の抗議活動を通して以下の教訓を引き出した。

もとより、我々の同志のサッコとヴァンゼッティはアメリカの法律によって惨殺され、世界中のプロレタリアートの熱狂的な抗議も功を奏しなかったが、今後、我々はますますこの事件から貴重な教訓を引き出さなければならない。すなわち、

一、我々はアナーキストにおける一国内の組織および国際的な組織にいっそう注意を傾けなければならない。我々はフランス滞在中のロシア人アナーキストの掲げる組織化の綱領を受け入れなければならない。

二、労働者や農民の団体に加わり、宣伝、教育、組織などの仕事に携わり、併せてベルリンの第一インターナショナル（アナルコ・サンディカリスム・インターナショナル）と手を取り合い団結せよ。あらゆる黄色や紅色の裏切り者を打ち倒すよう努力し、国際的な革命的労働者による「唯一大組合」（One Big Union）を完成させよ。

三、いかなる政党、政府、改良主義的な議会主義と経済政策に対しても徹底的に批判し、直接行動による社会革命を宣伝せよ。

四、アナーキズム組織内部の日和見主義者を一掃せよ。

時機はますます差し迫っている。本連盟は我々の綱領と提議に賛同する青年同志たちと手を携えることを望むものである！　我々は、サッコとヴァンゼッティの二人の犠牲者に、「妥協せず、屈服せぬ」との旗印のもとに団結し、社会革命の戦場に突き進むことを誓おうではないか！[20]

かくして、サッコとヴァンゼッティの死後に行なわれた連盟の抗議活動は、アナーキズムの宣伝活動を展開し、アナーキズムの社会的勢力を拡大する手段へと変化したのである。その結果、連盟は自らの組織の置かれている現状を客観視するのみならず、より一般的に視点から、アナーキスト同士の団結や労働者、農民との団結の重要性、ならびにアナーキズム組織におけるメンバー、綱領、組織そのもののあり方や今後の活動の具体的な方向性を再認識するに至ったの

である。

サッコ・ヴァンゼッティ事件を取り上げながらアナーキズムを宣伝し権力者と社会制度を批判する傾向は、『革命』週報とて例外ではなかった。一九二七年九月、『革命』週報は「薩凡記念号」なる特集号を発行した。その経緯について、編者は「巻頭語」のなかで、彼らはこれまでサッコとヴァンゼッティの救援活動に少しも携わってこなかったことに恥かしさを覚え、良心が咎めたため、事件の真相を明らかにし哀悼の意を表すべく記念号を刊行するに至ったと説明した。編者は更に、人権侵害であるこの度の事件に関心を払わず抵抗に立ち上がらなければ、いずれは己の人権も同様の侵害を被るであろうと中国の民衆に警鐘を鳴らした[21]。「哭薩哥凡齊蒂」を発表した碧波は、自由と正義のために従容として死に臨んだ両氏に敬意を表するとともに、「人を食う極悪非道な社会を根底から覆そうと努力しなければ、幸福という希望は永遠に訪れないのだ」と述べた[22]。宗緑は「薩凡惨殺的前後」という長文のなかで、芾甘「死囚牢中的六年――薩珂（Sacco）与凡宰特（Vanzetti）果然会被殺麽――」[23]に拠りつつ、両氏の逮捕から処刑に至るまでの事件の経緯を詳細に紹介し、本文を結ぶに当たって「抑圧されたすべての人間が目を覚まし、人を治め人間を支配するすべての制度が覆され、人間同士の区別が消滅し、人々が共通の目的に向かって努力し生活する」ときにこそ人類に正義が訪れるのだと強調した[24]。天工は「薩凡死後的感想」において、サッコ・ヴァンゼッティ事件に無関心な中国の民衆を批判し、「軍閥が縄張りを争い、盧布党〔共産党――引用者〕が復活を図ろうとする」この時代にこそ、我々は両氏の精神を継承し、「主義」と自由のために立ち上がろうではないかと呼びかけた[25]。

このほかにも、寄稿が遅れ「薩凡記念号」に掲載できなかったという「為薩凡之死敬告中国農工階級」なる一篇において、熙寿は事件の経緯を簡略に紹介し、文章の後半で以下のように述べている。

> 親愛なる農民と労働者たちよ！　この度のサッコ・ヴァンゼッティ事件の辿った経緯は、あなたがたにどのような感情を抱かせたのだろうか。我々は両氏の人格と苦境に深い同情を寄せなければならない。両氏は社会革命家であり、更に無政府革命家である！　両氏は我々労農階級のよき友人でもあるのだ！　両氏は全世界で最も抑圧を受けているのは我々労農階級であると考えた。そのため、彼らの過去のあらゆる闘争はすべて我々労農階級の利益の上に打ち立てられている。それゆえ、この度の死も、完全に我々労農階級の

ための犠牲であると言えるのだ。

親愛なる農民と労働者たちよ！　この度の事件を通して我々は更に政府の罪悪を見抜くことができた。彼ら――政府はブルジョアに買収されているため、人道の裏切り者となることを厭わなかったのだ！

親愛なる農民と労働者たちよ！　我々は今分かったのだ。すなわち、ブルジョアは完全に我々大勢の農民と労働者の共同の労働によって生産された品物を掠奪することに頼って生きているのであり、金持ちの財産は空から降ってきたものではなく、完全に我々農民と労働者が苦労して生産したものなのだ。言い換えれば、ブルジョアの財産は完全に我々労農階級から略奪したものなのだ。我々はもう目を覚ました。我々はすぐに立ち上がって座食の徒であるこれらの寄生階級――ブルジョアを打ち倒さなければならない。しかし、我々は更に知っておかなければならない。すなわち、ブルジョア自身はそもそも力を持っておらず、彼らが頼っているのは政府にほかならない。政府が樹立されたのはブルジョアを守るためであり、政府の役割は我々労農階級を抑圧することにある。というのも、労農階級とブルジョアとの利益は完全に衝突するものであり、〔政府は〕そうしなければブルジョアを喜ばせることはできないからだ！　それゆえ、政府は自ら我々労農階級を掠奪するばかりでなく、ブルジョアを手助けし我々を掠奪するのだ！

親愛なる農民と労働者たちよ！　我々はすでに目の前にいる二つの敵――政府とブルジョアを理解した。我々は自らの生存と利益を図ろうとするならば、今すぐに一致団結し、政府とブルジョアを攻撃しなければならない。

とはいえ、そればかりではない。我々は更に、人間の問題のみならず、彼ら――政府とブルジョアが頼っている政治制度と私産制度を根本から破壊し、無政府共産社会を建設することもはっきりと認識しておかなければならない。そうしなければ、彼らが再起を図る機会を消滅させることはできないのだ！

親愛なる農民と労働者たちよ！　我々はこのように目下の任務を設定した。こうしてこそ「革命」と言えるのだ！

親愛なる農民と労働者たちよ！　サッコとヴァンゼッティはこのような任務を引き受けたからこそ、アメリカのブルジョアの手先であるマサチューセッツ州政府に殺害されたのだ。我々は両氏に沈痛な哀悼の意を表するほか、今すぐ団結、武装し、両氏の精神を継承し、敵に戦いを挑まなければならない！[26]

熙寿はこのように、ブルジョアと労農階級との対立関係を典型的な形で描き出しながら、ブルジョアの搾取体制を突き崩し不平等な利益関係を容認する社会制度を覆すためには農民と労働者が一致団結して戦いに立ち上がらなければならないと労農階級に呼びかけたのである。サッコ・ヴァンゼッティ事件を契機に発表された熙寿の言論は、両氏を殺害したブルジョア、政府、法律に批判の矛先を向けるものであり、無政府共産社会という理想社会の実現を図ることに重点を置くものであった。

以上が、中国アナーキズム組織におけるサッコ・ヴァンゼッティ事件に対する反応の概括である。両氏が死刑に処される前に行なわれた連盟の抗議活動や一連の言論活動は、正義と人道のもとで裁判の死刑判決に抗議し、両氏の自由の回復を目的とするものであった。そして、両氏が死刑に処された後に行なわれた抗議活動と言論活動は、それまでの論調から逸脱して、弱者に迫害を加える権力者と既存の社会制度を批判し、アナーキズム組織の規模と勢力の拡大を図るものへと変化した。当時、巴金はアナーキズムに深く傾倒していたが、彼はサッコ・ヴァンゼッティ事件にいかなる関心を寄せたのだろうか。

三、サッコ・ヴァンゼッティ事件に対する巴金の関心の寄せ方

（１）フランス留学中の疎外感

一九二七年二月、巴金は留学のためフランスはパリを訪れた。当初はパリ五区のブランヴィル通り（Rue Blainville）の旅館に身を寄せたが、月末には隣接するトゥルヌフォール通り（Rue Tournefort）のアパートに越した。そして三月初め、巴金は三兄である李堯林（一九〇三－一九四五）宛てに次のように書いている。

> 僕はフランスに来てまだ一カ月ほどしか経っておらず、ラテン区〔パリ五区。カルティエ・ラタン（Quartier latin）とも言う――引用者〕にある旅館に住んでいる。毎日、いつものようにリュクサンブール公園に一、二度出かけ、夜には学校でフランス語の補習を受ける。それ以外、僕は六階建ての建物にある、ガスと玉ねぎの臭いが充満した小さな部屋に自分自身を閉じ込めている。僕には四角い小さな空しか見えず、陽の光すら届かない。
>
> 黄昏時にはよく街に出かけて散歩する。近くの数本の街は、夜になるといつも静まり返っている。お店は普段六時か七時には閉まるので、街には通行

人もあまり多くない。僕は黙然と一人で広々とした大通りを散歩し、心はまるで何かに閉ざされているようだ。僕の周りには形のない壁ばかり立ちはだかっている。〔……〕閑静な街を行き交う人と言えば、ぼろ着をまとった労働者と貧乏学生、キツネの毛皮を襟首に巻いた中流家庭の奥様やお嬢様ばかりだ。彼らは急ぎ足で通り過ぎて行く。一言も喋らない者もいれば、歌を口ずさんだり冗談を言ったりする者もいる。しかし、この歌声と笑い声のなかにも苦痛の声が入り混じっており、誰もが無理に喜び笑っているようだ！彼らはただ、泣き止まんがために笑っている。こうして僕はやっと分かったのだ、これまで人を理解したことも、パリを理解したこともないのだと。〔……〕[27]

かくしてパリに到着して間もない頃の巴金は、フランス社会に自らの居場所を見出せず、祖国から離れ他郷に暮らす他者として強い疎外感に襲われ、社会から孤立した自らの境遇に深い寂寞を覚えたのである。巴金のこの当時の心境は、四年後の一九三一年に発表された「我底眼涙」のなかでも語られている。その回想によれば、彼は当時、労働者や一般庶民と同じ環境のなかで暮らしながらも、自身がまるで別世界にいるように感じられ深い空虚感に囚われ、自らが目標とするものが見つからないどころか、何を追い求めようとしているのかさえ分からないほどであったという[28]。三兄の李堯林に宛てた手紙と同様に、「我底眼涙」においても巴金の寂寞に満ちた心情が吐露されたのである。

巴金はいかにしてこのような心境に陥ったのであろうか。その理由について、彼は晩年、以下のように明かしている。

〔……〕一九二七年二月、私は初めてフランスを訪れた。人も土地もよく知らず、友人のことが懐かしく、祖国の運命が気がかりであった。寂しさを紛らすために、私はペンと紙を借りて感情を述べ表した。〔……〕[29]

この自己言及から分かるように、フランスを訪れた当初の巴金が感じた寂寞には、「祖国の運命」を憂う心情が幾分含まれていたのである。「祖国の運命」とは、巴金がフランスに旅立つ前年の一九二六年から一九二八年にかけて、中国国民党が北京や地方の軍閥政権と闘った北伐を指していよう。当時アナーキストを自負する巴金が国家の統一を目指した北伐にいかなる態度を持っていたかについては後ほど触れるが、疎外感と寂寞から来るある種の空虚感が、「祖国

の運命」を憂う心情と相俟って、巴金を押し潰さんばかりであったことは確かである。

（２）サッコ・ヴァンゼッティ事件との出会いとヴァンゼッティとの文通

ちょうどこのような苦痛に苛まれていた頃、巴金は同年四月十二日にフランス社会党の機関紙である『毎日新聞』（*Le Quotidien*）の記事[30]を読んで、サッコとヴァンゼッティが七月十日以降の一週間以内に死刑に処されることを知った。それからほどなくして、ヴァンゼッティの自伝である*The Story of a Proletarian Life*[31]を入手した。巴金は後に「我底眼涙」のなかで、当時の状況を以下のように描いている。

> 僕は今にも滅亡しかけていたとき、突然ある日、本屋で偶然にも魚行商人が英語で書いた小冊子を手に入れた。そのなかの一節が僕の目に止まった。
> 「私は、どの家庭も住処を持ち、どの口もパンにありつき、どの心も教育を受け、どの〔人間の〕智慧も光明に満ちていることを願っている。」
> まるで大雨がやんだ後の大空のように、僕の心は明るく晴れ渡った。そこで僕はこの小冊子を買って帰った。本屋にはこの魚行商人に関係するささやかな本が二、三冊並べられていたので、それもいっしょに買って行った。僕は何度も読み直し、このイタリア人の魚行商人が書いた自伝、『一個無産階級的生涯底故事』を読み終えた[32]。

巴金は『一個無産階級的生涯底故事』を通して、ヴァンゼッティが貧しい家庭に生まれ育ち、丁稚奉公に出され肉体労働を余儀なくされたという幼少期の実体験や、アメリカという「希望の国」に憧れを抱きつつ故郷を離れて大西洋を渡ったものの、各地を転々としながら抑圧と搾取に満ちた過酷な肉体労働に耐え続けた彼の移民生活を目の当たりにした。そして、ヴァンゼッティがかつて索条工場のストライキを支持し、様々な職種の労働者の間で演説を振るうアナーキストとして活躍したことを知るに至った。そればかりでなく、巴金は、「ぼくはもう先導者を失った盲人ではない。僕はもう彷徨うことはない。僕はすでに先導者を見つけたのだ」[33]と述べるほど、ヴァンゼッティの自伝に深い感動を覚えたのである。それというのも、

> 〔……〕私は弱者、貧しい人々、虐げられた人々や抑圧された人々を擁護

する。私は英雄的な気概、犠牲、能力が、正義のための戦いに向けられるなら、それらを称賛する。私は、神、法律、祖国の名のもとに、自由と平等、最も純粋な抽象的観念、最も崇高な人道的理想の名のもとに、最も凶悪な犯罪が行なわれてきたこと、そしてそれが更に行なわれ続けていくことを知っている。将来、光明が世界を覆い尽くす日が訪れて初めて、少数者が神などの名のもとで人々に悪事を働くことはなくなるだろう。

〔……〕

私の心には博愛と人類愛の観念が芽生えた。私は、誰かがほかの者に利益をもたらし、或いは危害を加えることは、種族全体に利益をもたらし、或いは危害を加えることであると考える。私は、人々の自由のなかに自らの自由を求め、人々の幸福のなかに自らの幸福を求める。私は、正当な人間社会を築くための唯一の道徳的基礎は義務、権利、事実の三者が平等であることにあり、これを基礎に据えてこそ正当な人間社会が築かれるのだと信じている。〔……〕[34]

という自伝のなかの一節にも示されているように、巴金は、搾取や抑圧に喘ぐ弱者に寄り添い、政府や法律を盾に権力を振りかざす支配者に抵抗する、博愛、正義、自由に貫かれたヴァンゼッティの思想に触れたからであろう。

このような経緯から、巴金はサッコ・ヴァンゼッティ事件に注意を向けるようになった。パリの街には講演会、救援活動、抗議デモに関する情報が溢れていたが[35]、同じ時期にフランスに滞在していた友人の呉克剛（一九〇三－一九九九）と衛恵林（一九〇四－一九九二）が一連の活動に積極的に加わっていた[36]のとは対照的に、巴金はヴァンゼッティと文通を始めたのである。

一九二七年五月十七日、巴金はヴァンゼッティ宛てに最初の手紙を送った。この書簡は現在所在不明である。続く七月上旬、巴金はヴァンゼッティが六月九日に認めた返信[37]を受け取り、後に「凡宰特致本社黒浪同志信—殉道者遺書之一」と題して翻訳紹介した。書簡のなかで、ヴァンゼッティは自らの思想の一端を以下のように開陳している。

とはいえ、我々の正義は必ず勝利すると運命づけられているわけではない。そうではないのだ！　このことを君にお話ししよう。人類の歴史には二つの基本的要素がある。個人的要素と宇宙的要素である。すなわち、人類は大体において二種類に分けられる。一つは専制であり、一つは自由である。個人

は専制の暴君にもなれば、自由の戦士にもなる。宇宙について言えば、我々はそこで生まれ、そのなかで生きている。今のところ、宇宙的要素はやはり人類の意志と力を超えている。宇宙的要素を除外して歴史を論ずれば、歴史は完全に人間の意志によって決定づけられると言えよう。それは、我々が望むような形に変わるのだ。〔……〕私が思うに、人類と歴史は、いずれもあらかじめ決定づけられたものではない。「自然」は我々に無限の宝物をもたらしてくれた。それによって、我々は生活の安全を保持し、向上を図ることができる。それは、自由を渇望し燃え尽きることのない我々の心のなかの炎を燃え上がらせたのだ。それは我々にこのような能力を与えてくれたが、かりにこの能力を自由に発展させることができれば、その結果はきっと驚くべきものとなるでしょう。しかし、もう一方では、滅びた文明と滅びた民族は歴史の反対の側面を我々に教える。すなわち、機械と教化の両者の進歩が我々の生産力を高めるとき、労働者は相変わらず貧困と欠乏の苦境のなかに置かれ、仕事もますます不衛生なものとなり、ますます辛いものとなる。また、学問や物質的条件が大体において進歩を見せるとき、人々の堕落の程度はますます深まり、道徳と人格はついに消滅し、体力も徐々に衰えていく。そしてついには、我々自身とその生活の革新を図らなければ滅亡あるのみという、人類における二つの普遍的な局面に直面する。これらの事実は、我々に歴史のもう一つの側面を伝え、証明している。このような歴史の消極的な一面は、分かりにくく、解釈し難いものである。〔……〕

「アナーキー」の真の意義は、生活を解放し個人を解放し、人間の人間に対する抑圧と搾取を取り除く方法を通して、このような歴史の消極的な結果を理解し、それを消滅させることにある。それゆえ、「アナーキー」とは我々が生活に対処するための唯一の道であり方法である。しかし、これは人々が望むものでなければならず、人々の努力によって決定され実現されるものでなければならない。それは自ずと実現されるものではない[38]。

社会の進化すなわち近代化に伴い物質的な豊かさが実現される一方で、労働者や一般民衆の生活がますます困窮を極め道徳が堕落の一途を辿る。そのような現実状況を打破すべく、ヴァンゼッティはアナーキズムによって根本的な社会改革を遂げ、自由と平等に貫かれた無政府社会の実現を図るべきであると提唱した。これに接した当時の心境について、巴金は後に、「それからというもの、僕は再び恐怖や悲哀を感じることはなかった。僕は生活に目標を持つことがで

きた。そして、僕にも生活に直面する勇気が生まれた」[39]と回想している。ヴァンゼッティの思想が巴金に深い感銘を与えたことが分かる。

この返信に対して、巴金は七月十一日に、ヴァンゼッティ宛てに二通目の手紙を送った。この書簡も現在所在不明である。同月下旬、巴金は肺病の療養のため、パリから東に百キロほど離れたシャトー＝ティエリ（Château-Thierry）に移り住んだ。そして八月上旬、巴金はヴァンゼッティが七月二十三日に認めた返信[40]を受け取った。この書簡においても、ヴァンゼッティは自らの思想を述べている。

君が手紙のなかで語った我々の理想について、私は基本的に同意する。この問題について私が前の手紙のなかで述べたのも、主として、自由のための苦難に満ちた闘争によりよく向き合い、そして宿命論を解消することによって将来に対する幻想を断ち切るよう、君の精神を励まし、君の意志を鍛え上げるためである。それはちょうど、私が若い同志たちや新たな信仰者たちに諭すのと同じように。

〔……〕

今や、我々は人類とともに専制と暗黒へと引きずり込まれていることは言うまでもない。我々はどこに向かっているのだろうか。

よく知られた歴史が伝えるように、人類は確かに進歩を続けている。ゆっくりと、不確実に、前進もすれば後退もするが、それでも着実に前進している。

しかし、すでに滅びた文明も同じように自らの物語を語っている。歴史学ができ上がる前に何が起こったのか、我々は知ることはできない。今日知られているように、歴史は進化論に似ていて、思索を深める人の疑問に答えることは到底できない。とすれば、この後退と専制の時代に続くものは何であろうか。必然的にほかの専制政治に降伏するような偽りの民主政治が再来するのか。まさに数千年もの歴史が辿ってきたように。

アナーキズム、そしてアナーキストだけが、これらの悪循環を打ち破り、生命と自然を一体化させることができる。〔生命と自然の一体化は、〕新たな秩序を作り上げる――より正確に言えば、新たな秩序を構成する――という、物事の本質から生み出されるのである。歴史は、今日も続いているような恐ろしい、閉ざされた上述の循環に逆戻りする代わりに、自由という大海原へと向かおうとするのである。

これはとてつもなく重大な任務であるが、人間が成し得ないものではない。我々には分かっている、惑わされ、誤導され、窮地に追い込まれた労働者階級やあらゆる階級の人々が、ほとんど本能的に歴史における偉大な解放のために我々のなかに加わるとき、我々は自由という幸福の王国を築き上げるであろう。とはいえ、我々はそのときにおいても、自らの任務のために努力しなければならない。さもなければ、新たな専制政治が今日の専制政治に取って代わり、大きな破滅を導くであろう[41]。

ヴァンゼッティは、今日の専制政治に代わる、民主政治の仮面を被った新たな専制政治の誕生を阻止し、抑圧と搾取に満ちた社会制度を覆し、歴史における悪循環を食い止めるために、これまで虐げられてきたあらゆる階級の人間が人類の解放と自由の実現を目指して、アナーキズム運動に加わるべきであると強調した。

ヴァンゼッティからの返信を受け取った直後の八月十三日、巴金はヴァンゼッティと救援委員会宛てにそれぞれ手紙を送った[42]。ヴァンゼッティ宛ての手紙を結ぶに当たって、巴金は以下のように書いている。

僕はもちろん、あなたが手紙のなかで書いたことに賛成します。そして、あなたの丁寧且つ心のこもったお手紙にも感謝します。

あなたは、自身の体験が僕を鼓舞し完全ならしめるだろうと書いたが、その通りです。愛する同志よ、僕は誓おう、「暗黒の災難に押し潰され、引き裂かれる」ことは永遠にあり得ないのだと。

悲劇だ、悲劇だ、いつも悲劇だ。僕らは死んでしまうだろう。そして惨殺され、火に焼かれ、監禁されるだろう。自由のために戦う僕らは、僕ら自身のために自由を勝ち取ることはない。しかしながら、僕らは、僕ら自身のためにではなく、子どもたちのために最後の勝利を手にするだろう。死とは何か、苦しみとは何か。もしある日、僕らの美しいアナーキズムが実現し、子どもたちに幸福がもたらされたら、あなたは永遠に生き続けるだろう！[43]

この書簡から分かるように、巴金は、死を目前にしながらも権力者の抑圧に屈しないヴァンゼッティの強い精神力によって勇気づけられたばかりでなく、抑圧に耐えてきたすべての階級を組織し、彼らを主体とするアナーキズム運動によって権力者や政府を倒すというヴァンゼッティのアナーキズム思想に賛同し

たのである。

かくして、巴金がヴァンゼッティの思想に強い共感を寄せたことは明らかである。巴金は当時、アナーキストを自負していたが、彼自身は果たしていかなる思想を持っていたのであろうか。

（3）巴金のアナーキズム思想と現実問題

サッコ・ヴァンゼッティ事件を知る一カ月前の一九二七年三月頃、フランスに来て間もない巴金は、北伐が進行中の中国を離れたことに苦痛を覚え、アナーキズムと現実問題に関心を抱くようになった。そこで、パリ滞在中の呉克剛、衛恵林と三人でアナーキズムの問題について議論し、三篇の文章を完成させた。そして翌四月、三篇の文章は『無政府主義与実際問題』[44]として出版された[45]。

衛恵林、巴金、君毅（呉克剛）の共著からなるこの書物は、民衆の置かれた社会的な現実状況や革命が民衆の生活に与える影響を度外視して、アナーキズムを教条的に捉えその原理のみに従って社会革命を展開することを唱える一部の言説を批判したものである。そのため、アナーキストが民衆のなかに加わり、彼らの状況に応じてアナーキズムの原理を適宜変化させながら革命運動を展開し、それによって彼らの利益を実現していくべきであるという観点において、三人とも意見が一致している。しかしながら、今日の革命運動をどのように捉え、いかなるかたちでそれに加わるかを巡って、三人の意見は分裂した。

例えば、衛恵林は、

> 中国の今日の運動について言うと、我々の一部の同志はそれを国民党の運動と見なし、我々には関係ないものと考えており、ほかの一部の同志は今日のアナーキストは国民革命の事業に参加しなければならないと考えている。しかし、両者はいずれも正しい見方ではない。なぜなら、今日の中国の革命運動は単なる国民党の運動ではないからである。中国の数十年来の現状、ならびに今日の中国の民衆の困窮した生活について考察しさえすれば、この度の運動の原動力は民衆のなかにあり、特定の党派にあるのではないことが明らかとなるであろう。ここ数年の中国各大都市における労働者運動、とりわけ外国の資本主義に対する抵抗運動は、決して少数者の扇動の結果ではなく、実際には労働者の生活に基づく要求、自由への要求を契機に発生した運動である。〔……〕中国の今日の問題や今日の運動は、中国人の解放運動である。表面的には国民党の運動のように見えても、こうした問題は実際のと

ころ、国民党の政治方法、武装行動だけに頼って完全に解決され得るものではない。〔……〕[46]

〔……〕比較的影響力の強い政治活動や政治革命は必ずや民衆のなかに有力なある種の原因を持っていることを、我々は知っておかなければならない。そのような政治活動が成功を収めるか否かは、すべて民衆の何らかの要求や傾向に左右されるに違いないのである。〔……〕[47]

と述べており、今日の革命運動は国民党の主導のもとに行なわれたものではなく、民衆が自らを革命運動の主体に据え、権力者に抵抗し自らの現実生活の改革を図るために展開されたものであると考えた。衛恵林はそれゆえ、中国アナーキストは民衆の革命運動に加わりアナーキズムを宣伝し、自由と解放の実現を目指して民衆を社会革命の道へと導かなければならないと唱えた[48]。

一方の君毅は、かつて、アナーキストは中国各地で行なわれている軍閥同士の勢力争いや帝国主義国家間の権力闘争に口出しすべきではなく、「純粋な」アナーキズム運動ではない所謂革命運動に加わるべきではないと考えていた。しかし今では見方が変化し、ブルジョア革命であったフランス革命の有した革命的意義を認め、今日の中国の革命運動が民衆の生活に少なからぬ積極的な意義を持つに違いないと考えるようになったという[49]。君毅は言う。

アナーキズムの目的、その唯一の目的とは、民衆の完全な解放を勝ち取ることであり、民衆の進化を阻むあらゆる障害物――政府、私産、宗教的迷信などを完全に破壊し、民衆の自由な発展、創造を可能にすることである。

アナーキストは、常に民衆に近づき、民衆のなかに加わり、民衆の一員とならなければならない。そして、民衆が自らの地位を理解し、自身の力量を知り、神にも皇帝にも政党にも偉人にも頼ることなく己の努力と奮闘を通して解放を追い求める勇気を備えるよう、働きかけなければならない[50]。

革命運動において、民衆が専ら自らの力を頼りに自由と解放を勝ち取ることができるよう、アナーキストは政府をはじめとする障害物をすべて破壊し、民衆を先導する役割を担うべきであるという。この点に関しては、君毅の見解は衛恵林のそれと基本的に一致する。しかし、いかにして中国の革命運動に関わっていくかについて、君毅は衛恵林とは異なる見解を呈した。

アナーキストは革命に参加しなければならないという私の主張は、多くの同志の賛同を得るだろう。しかし、我々はどのように参加すればよいのだろうか。国民党に対してどのような態度を取ればよいのだろうか。こうした問題を解決するのはたいへん難しい。

今日の中国の同志は、決して革命運動には参加せず、ひたすら国民党を批判し、攻撃する。このような態度には、私は反対するものである[51]。

私が思うに、国民党がいかに悪辣であろうとも、そのなかには確かに、官職につき金儲けをするために革命に加わったわけではない者も数多く存在する。それに彼らの現在の任務、例えば外国の侵略政策を打ち倒し、「道を尊ぶ」北洋軍閥を打ち倒すことは、我々アナーキストが取り組もうとし、取り組まなければならないものでもある。国民党が成功を収めても、アナーキズムの実現にはまだほど遠い。しかし、それによって民衆の苦痛が今にも増して強まっていくという見方は、革命の重要性を弁えたものとは到底言えない。

私の結論は以下の通りである。

消極的な方面から言えば、今日の革命時期において、アナーキストは全力を挙げて旧党に反対しなければならない。そして国民党に対して、今しばらくは友党として接し、同情を寄せ、攻撃を加えない。

積極的な方面から言えば、国民党の外部（現実的に不可能なら、国民党の内部）においてこの度の革命運動に積極的に参加し、それを徐々に民衆化させ、アナーキズム化する[52]。

民衆が政府や政党に依拠することなく主体的に革命運動を展開し自由と解放を勝ち取るようにするためには、アナーキストは国民党という政治権力の内部にまで入り込み、党の革命運動に参加するかたちで民衆を指導し主義を宣伝しなければならない、と言うのである。アナーキストは民衆自らが主導する革命運動に直接加わるべきであるという衛恵林の見解とは対照的に、君毅は、アナーキストが国民党に加わり民衆を指導してこそ、民衆は権力者に頼らずに自らの力で革命運動を成し遂げられるという、甚だ矛盾に満ちた結論を下したのである。

それでは、巴金は国民党をいかに評価し、民衆の革命運動をどのように捉えていたのだろうか。

中国は今や、革命の時期に入っている。今日の中国の革命運動は、もはや国民党の運動ではなく、民衆の革命運動である。何万人もの労働者がストライキに入り、数多の青年が戦場に赴き戦いを繰り広げ、白色テロのもとで、多くの革命家が犠牲の精神を持って死刑に処され、牢獄に投ぜられた。彼らが、盲目的に少数者の指揮を完全に受け入れており、官職につき金を儲けようと妄想する人間、新しい軍閥の手先、純粋な三民主義の信奉者であり、ブルジョアの政府を樹立しようと企んでいるとは、私にはどうしても信じることはできない。国民政府の北伐は一つの問題で、中国の革命運動はまた別の問題である。半ば植民地化された国家が列強の支配から脱却し独立するための戦争は、アナーキストが目的とするものではない。しかし、アナーキストはそれに反対するわけではない。ただし我々は、一歩先を進むよう主張するだけである。それと同じように、我々は資本主義を消滅させる前に、帝国主義を打ち倒す運動に反対することはできない。〔……〕[53]

巴金は、多くの青年や革命家の従事する革命運動が政府の樹立や権力の掌握を目的とするものではないことを積極的に評価し、今日の革命運動は国民政府の北伐と区別されなければならないと強調した。権力者に決して与しないというアナーキストとしての立場がここに表明されているが、それは、巴金がアナーキズムに傾倒して以降、一貫して堅持してきたものであった[54]。しかしながら、巴金はそのようなスタンスから国民政府の北伐を批判することはなかった。巴金は更に言う。

中国の革命を見てみよう。国民党の主張は我々のそれとは正反対のものであり、原理の面から言うと彼らは我々の敵である。彼らはよき政府を建設しようとするが、我々はあらゆる政府を覆そうとする。このことは誰の目にも明らかである。しかし、個別の事業、例えば軍閥や帝国主義などを打ち倒すことに対して、我々は反対しない。ただ、我々は更に前を行っており、国民党の樹立する政府に反対し、彼らの打ち立てるあらゆるものに反対するだけである。〔……〕一般民衆が国民党に同情を寄せるものと言えば、いくつかのスローガンだけである。ほかの面において、彼らの意見は恐らく国民党のそれと衝突するであろう。今のところ、国民党が民衆を率いているようだ（？）が、もし、我々も民衆のなかに入り、革命の渦のなかに身を投じ、民衆をより大きな目標へと導くことができれば、民衆は自ずと国民党から離れ、

我々についてくるであろう。〔……〕[55]

国民党や共産党への態度については、我々は原理の面から彼らの主張を批判することができる。〔……〕同志のなかには、例えば軍閥を打ち倒すといった特定の事業において国民党と手を取り合っても差し支えないと主張する者がいる。〔……〕しかし、国民党に加入すべきとの主張に対して、私は賛成することはできない[56]。

巴金が北伐に反対しなかったのは、それが軍閥や帝国主義の打倒を目指していたからである。そのような目的は、アナーキストが成し遂げようとするものではなかったにせよ、軍閥や帝国主義における権力構造や支配体制を破壊するという根本的な性質は、巴金にとって確かに評価できるものであった。北伐が君毅をはじめ一部のアナーキストの間で共感を以て迎え入れられたのもそのためであろう。しかしながら、国民政府の北伐が軍閥や帝国主義を打ち倒した後に政府を樹立し、権力体制を築こうとすることに対して、巴金は一アナーキストとして原理の立場から批判し、国民党に加入することに断固反対したのである。一方、巴金は君毅とは対照的に、国民党と民衆との隔たりが大きく、今日の民衆運動も国民党の指揮のもとで展開されているものではないと考えたため、アナーキストは国民党に加入するよりも直接民衆のなかに入り主義を宣伝し、彼らを社会革命へと導かなければならないと唱えた。そしてその際には、民衆の現実的な要求や生活状況を見据えたうえで革命運動を立ち上げるべきであり、「労働者運動に従事しながらも労働者の切実な要求も理解せず、お腹を空かせたまま彼らを革命に参加させるのはできない相談である」[57]と強調した。このように民衆を主体とする組織化された革命運動を唱えたからこそ、巴金はヴァンゼッティのアナーキズム思想に共鳴したのであろう。

かくして巴金は、衛恵林と同様に、今日における民衆の革命運動は彼らを主体とし彼ら自身の自由と解放を勝ち取ることを目指すものであり、特定の政党における政治運動と切り離されたものであると捉えていた。そればかりでなく、巴金は君毅と同様に、国民政府の北伐の基本的な性質、すなわち軍閥や帝国主義における権力構造や支配体制を破壊することに同調した。しかしながら、民衆を指揮するために国民党の革命運動に参加するという君毅の見解に対して、巴金は一アナーキストとして正面から批判した。

かくして巴金は、北伐への態度を通して、国民党という政治権力を根本から

批判しながらも国民政府の北伐における権力破壊の性質に賛同する、アナーキストとしては折衷主義的な立場を表明したのである。巴金のそのような姿勢は、以下に見るように、『革命』週報および同誌におけるサッコ・ヴァンゼッティ事件の取り上げ方に対する評価にも現れていた。

（４）『革命』週報への批判と共感

『革命』週報は一九二七年五月に創刊されたアナーキズム系定期刊行物の一つである。創刊の経緯について、巴金と親交のあった畢修勺（一九〇二－一九九二）は晩年、以下のように振り返っている。

一九二七年四月中旬のある日の午後、呉稚暉、李石曽、匡互生、陸翰文と私の五人は、フランス租界辣斐徳路（今の復興東路）の停雲里にある、陸翰文の親戚の住まいの母屋で会議を開き、青年へのアナーキズムの宣伝について議論した。呉と李は大学の創設を提案し、私は新聞の発行を主張した。匡互生は当時、すでに江湾で極めて特色のある「立達学院」を開設していた。〔……〕匡によれば、江湾には大学の創設に相応しい場所がある。そこの「模範工場」は〔孫伝芳〕軍閥政府の資産で、広大な土地を所有しているため、「労農学院」を開設できるという。先ずは「労工学院」を設立し、日本で勉学中の沈仲九を呼び戻し彼に主宰させ、「労農学院」はその後で準備すればよいと匡は言った。〔……〕呉と李は更に、貧しい学生を入学させ、学費を免除し、食費と宿舎費も学校が負担すると主張した。この経費が巨額に達すると見込まれたため、呉と李は、蔡孑民氏と相談し解決策を講じてもらうとよいと言った。蔡が国民党側の教育の重責を負っていたからである。〔……〕学校の敷地の問題は匡互生が交渉に当たった。沈仲九も、彼を直ちに帰国させるよう、匡に日本に電報を打たせた。匡は易培基が李石曽と仲がよいことを知っていたため、易を校長に迎えることを提案したところ、呉と李と陸と私は全員同意した。それと同時に、五月から週報を発行することを全体で決定した。これが後の『革命』週報である。沈仲九が主編を担当し、印刷費用は主に李石曽が調達した。

五月、『革命』週報が出版された。沈仲九が発刊の辞を担当し、私はそれを見てたいへん気に入った。『革命』週報の主旨はアナーキズムを宣伝することにあった。共産党の思想に賛成するものでもなければ、国民党の政策を擁護するものでもなかったため、双方からの攻撃に曝される新聞と言えよう。

第五期まで刊行すると、沈仲九は私に、もう主編を続けたくないと言ってきた。私はそれを聞いてたいへん驚いた。新聞の創刊時には鳴り物入りで吹聴しておいて第五期で停刊を宣言するとは、自分自身にも読者にも申し訳が立たないではないか。彼の弱気なところにがっかりした。「関心があるなら、引き受けたらよい」と彼は私に言った。私は自分の能力に限界があり、これほどの重責を担う勇気はないと分かっていた。彼が弱音を吐く以上、私もついにその役目を引受けた。そして、『革命』週報が一九二九年の廃刊に追い込まれるまで、私はその苦役に耐え続けた[58]。

以上が『革命』週報の創刊の経緯である。畢修勺が挙げた人物を見ていくと、李石曽（一八八一－一九七三）は一九〇二年にフランス公使に就任した孫宝琦（一八六七－一九三一）に随従しフランスに赴き、農業学校で学んだ後、パスツール学院（Institut Pasteur）で生物学を専攻するなか、クロポトキン（Pyotr Alexeevich Kropotkin, 一八四二－一九二一）のアナーキズムに傾倒した。一九〇六年に呉稚暉（一八六五－一九五三）らとともにパリで「世界社」を結成し、翌一九〇七年に『新世紀』（*La Novaj Tempoj*）を創刊、バクーニン（Mikhail Bakunin, 一八一四－一八七六）、クロポトキンらの学説を中心にアナーキズムの宣伝に努めた。一九一五年に呉稚暉、蔡元培（一八六八－一九四〇）らと「勤工倹学会」、「華法教育会」を設立、一九一九年に「留法勤工倹学会」を組織し、多くの学生をフランスに留学させた。一九一七年に北京大学の教授を務め、一九二一年に呉稚暉らとともにリヨン中法大学を創設した。一九二四年一月、呉稚暉とともに中国国民党第一期中央監察委員に選出され、以後第六期まで連続当選した。一九二七年四月、上海での反共クーデター後に国民政府が成立すると、中央特別委員会委員、国民政府教育行政委員会委員を務めた。

呉稚暉は、一九〇二年に蔡元培、章炳麟（一八六九－一九三六）らと「愛国学社」を創設し、清朝批判の言論活動を展開した。一九〇三年、「蘇報」事件によりイギリスに渡り、ロンドンで孫文（一八六六－一九二五）に出会い、その思想に傾倒するあまり一九〇五年に「中国同盟会」に加入した。パリで『新世紀』の発行に携わった後、一九一一年に帰国し、以降、文字改革と国語運動に尽力する傍ら、李石曽、蔡元培らとともに勤工倹学運動を推進した。一九二一年にリヨン中法大学の校長に就任した。一九二七年四月の上海クーデターに際して蒋介石を積極的に支持し、反共主義の立場から蒋介石を擁護し続

けた。

このほか、蔡元培（字は孑民）は一九一二年一月、中華民国臨時政府の成立により初代教育総長に就任した。一九一六年から一九二七年にかけて北京大学校長として大学を改革し、「学術」と「自由」の校風を確立した。また、一九二〇年から一九三〇年にかけて中法大学校長を兼任し、一九二八年から一九四〇年にかけて中央研究院院長に就任した。匡互生（一八九一－一九三三）は一九一九年の五四運動に際してパリ講和会議に抗議する学生デモを組織し、曹汝霖（一八七七－一九六六）の屋敷に火を放った人物であり、湖南、浙江一帯で教育活動に従事した後、一九二五年に上海江湾に「立達学院」を創設した。易培基（一八八〇－一九三七）は、一九二四年に中華民国国務院教育総長を務めた。翌一九二五年に中華民国国立故宮博物院が北京紫禁城に設立されると、李石曽を清室善後委員会委員長に、易は同委員会首席委員を務めた。一九二七年四月の上海クーデター後、上海国立労働大学校長に就任し、翌一九二八年には李石曽、呉稚暉らの推薦により国民党中央政治会議委員を務め、農鉱部長に就任した。

会議が持たれた直後の一九二七年五月、上海江湾国立労働大学の創設が中央政治会議において議決され、労働大学労工学院は九月に開校した。李石曽と呉稚暉を中心とする国民党元老派が大学の設立に関わっている点や、勤工倹学の教育方式を採り「国民党のために労働運動の人材を育成する」[59]との目標が掲げられていた点から見ても、労働大学は国民党の主導のもとに創設されたことは明らかである。そうしたなか、畢修勺の提案により『革命』週報を発行する運びとなったが、これに関連して呉稚暉は以下のように振り返っている。

> 一九二七年四月の反共以後、蒋〔介石〕総司令は、私と李石曽氏が何の職にも就かずお金を持っていなかったことから、小遣いとしてそれぞれに二千元ずつ貸してくださった。李氏はすぐにこの四千元を何人かに渡し、新聞を発行させた。〔……〕[60]

呉稚暉はこの四千元は「新聞」の発行に当てられたと述べているが、李石曽がこの資金を手にした時期、労働大学の創設と『革命』週報の発行を巡って李石曽と呉稚暉を中心に会議が持たれた時期、「〔『革命』週報の〕印刷費用は主に李石曽が調達した」とする畢修勺の回想を総合すると、呉稚暉の言う「新聞」とは『革命』週報であると見て間違いなかろう。

畢修勺によれば、『革命』週報は共産党にも国民党にも与しない、それゆえ双方から攻撃され兼ねない新聞であった。しかし当時、『革命』週報第五期で主編を降りた沈仲九に次いで主編を担当することになった畢修勺は、碧波との筆名で第六期に「告中国的社会革命者」を発表し、そのなかで以下のように述べている。

〔……〕我々はあらゆる強権に反対するとはいえ、強権でも先ずは酷いものから取り除かなければならない。それゆえ、我々は国民党と同様に、努めて共産党に反対しなければならない。

同志たちよ！　我々は原理、方法、或いは事実のいずれにおいても、共産党のそれとは完全に対立する。原理において、我々は自由と平等を主張するが、共産党はプロレタリア独裁を提唱する。方法において、我々は公明正大で真に革命的な行動を採るが、共産党は専ら、卑怯下劣でごろつきや土匪同然の行為を重んじる。事実において、言うまでもないが、我々は共産党勢力の範囲内では僅かな活動の機会も得られないのである。

〔……〕

同志たちよ、もしもまだ社会革命を信ずるなら、国民党と同様に共産党に反対しようではないか！　〔……〕[61]

この発言について坂井洋史は、「少なくともこの初期の論調を見る限りで、国民党、共産党は同時に批判の対象とされるが、『より強権的な』共産党を主たる批判対象とし、次要の強権＝国民党には許容の余地を与えていること、明白だろう」[62]と分析している。畢修勺はアナーキストとしてあらゆる権力を拒否する立場にありながらも、より強力な権力組織を倒すためなら進んでほかの権力組織と足並みを揃える必要があると考えていたことが分かる。そのような姿勢は、先に取り上げたアナーキズムと現実問題を巡る議論のなかで示された、国民党の革命運動に参加することに賛同するという君毅のスタンスに通じるものであろうが、巴金がそのことを取り上げて批判したことはすでに見た通りである。

国民党の要人が『革命』週報の発行に深く関わり、『革命』週報の主編を務めた畢修勺が国民党への同調を呼びかけたことは、同誌と国民政府との密接な関係を読者に印象づけたに違いない。当時畢修勺と親交のあった巴金は、果たして『革命』週報をどのように評価していたのだろうか。畢修勺は以下のよう

に回想している。

「法文専修館」の開設よりもしばらく前から、私と芾甘の間には頻繁な行き来があった。彼が最初に翻訳した『麺包略取』〔クロポトキン著。『克氏全集』第二巻、上海江湾自由書店、一九二七年十一月――引用者〕の巻頭に載っているフランス人のエリゼ・ルクリュ〔Élisée Reclus, 一八三〇－一九〇五、フランスの地理学者、アナーキスト――引用者〕の序文は私が代わりに翻訳したもので、彼が一九二七年初めにフランスに旅立つ際、パスポートとビザの手続き、フランの両替、乗船切符の購入もすべて私が代わりに手配したものである。『民鐘』の刊行を引き継ぐよう（私が第何期から『民鐘』を引き継ぎ、『民鐘』が第何期まで発行したかは、まったく覚えていない)、私を広東の黎健民〔『民鐘』の主編――引用者〕に紹介したのも彼である。いずれにせよ、当時、我々の仲は決して悪くはなかった。『革命』週報の主編を担当するようになると、私は彼に手紙を書き、週報への寄稿を依頼した。ところが、彼の返信はたいそう私を驚かせた。彼は、私が李石曽らと合作しすでに「堕落」したため、私が編集した新聞には絶対に寄稿しない、そして二度と私とは交わらないと書いてきた。私は自分の為人を知っていたから、「堕落」という言葉に腹を立てなかった。私が驚いたのは、彼が同志にして友人である人間に対してがらりと〔態度を〕変えて絶交の手紙を書いたことである。それは確かに私が思ってもみなかったことであった。彼は私が国民党の要人と付き合い合作することを咎めたが、アナーキズムの立場からすれば、私は彼の正確な見解には感服すら覚えた。そう考えると、内心些か不安に襲われた[63]。

「法文専修館」とは、畢修勺がフランスでの勤工倹学を終えて帰国した後、一九二六年夏頃に上海フランス租界唐家湾に開設したフランス語学習塾である[64]。このことから、巴金と畢修勺が交わりを結んだのは一九二六年夏よりも前のことと推測される。知り合って間もないとはいえ、畢修勺は巴金のフランス留学の便宜を図り、巴金は畢修勺に『民鐘』主編の仕事を紹介するなど、彼らは互いにアナーキストとしての活動を積極的に支え合っていた。それにもかかわらず、巴金は畢修勺に絶交の手紙を送り、『革命』週報への寄稿の依頼を断り、李石曽との接触が「堕落」であると批判したのである。

それでは、巴金自身は『革命』週報についてどのように評価していたのだろ

うか。一九二七年十一月、巴金は「寄革命週報編者的信」のなかで、

> 私はかつて、『革命』週報の主張に反対したことがある。そして今でもそれに反対する。――私も一人のアナーキストではあるけれども[65]。

と述べている。『革命』週報の主張に向けられた批判がどのようなものであったかについて明らかにされていないものの、一九二七年八月、巴金は「空前絶後的妙文」のなかで李石曽の言論を取り上げ、以下のように批判したことがある。

> 聞くところによると、李石曽氏の大作「現今革命之意義」は「近年稀に見る文章で読む者を仰天させる」(『申報』を見よ)そうだ。しかし、学識が浅薄な私にはどうしても最後まで読み進めることができなかった。私は次の数行しか覚えていない。
>
> 第三段階:階級革命、或いは財産革命、経済革命とも言う。
>
> 第四段階:民生革命、或いは社会革命、大同革命とも言う。
>
> 〔……〕「上海における護党が第四段階である」と言うのだ。国民党政権を擁護するために、偽者の共産党員を殺害することが「大同革命」であり、「社会革命」であるとすれば、このような社会革命は実に風変わりなものではないか。上海ですでに社会革命や大同革命が起こっていたとは、私は夢にも思わなかった。〔……〕[66]

「現今革命之意義」とは、『革命』週報第一期および第四期に掲載された李石曽の論文である。嵯峨隆によれば、本稿は李石曽が、「生物は単純なものから複雑なものへ、そして比較的劣等なものから比較的善(較善)なるものへと進」むという「自然界の進化の公理」から出発し、当時の中国革命を進化論的観点に基づいて評価しようとしたものである。李石曽は、人類の歴史が辿ってきた革命の各段階を主として、王朝交替(第一段階)、フランス革命や辛亥革命(第二段階)、ロシア革命(第三段階)、孫文の民生革命(第四段階)という四段階に区分し、それぞれの段階を更に、戊戌変法(第一段階)、辛亥改元(第二段階)、武漢政府のソビエト化(第三段階)、上海での護党運動(第四段階)として、中国革命のなかに位置づけ直した。言い換えれば、「李石曽は一九二七年三〜四月における国民党の反共政策の明確化を以て、第四段階の理

想的革命の到来」と評価したのである[67]。巴金が突いたのもこの点であり、権力者を倒し政府を覆し民衆の自由と解放を実現させるはずの社会革命が、国民党の権力強化を図るための反共クーデターと同日に語られたことに批判の矛先を向けたのである。

かくして巴金は、国民党元老派である李石曽の思想にも、李石曽が発行に関わった『革命』週報にも辛辣な批判を加えたのである。ところが、巴金は同誌におけるサッコ・ヴァンゼッティ事件の取り上げ方に対して、極めて寛容な評価を与えていた。「寄革命週報編者的信」は更に以下のように綴られている。

> 私はかつて『革命』を攻撃したことがあり、今後も更に攻撃を加えるだろう。しかしながら、私はあなたがたが発表したサッコとヴァンゼッティ（あなたがたはヴアンゼツチと訳している）に関する文章に対してたいへん同情するものであることをお伝えしなければならならい。私ばかりではない。かりにサッコとヴァンゼッティの両氏が存命なら、彼らもあなたがたに深謝するだろう。なぜだろうか。それは、ヴァンゼッティが私に説いたのと同じように、あなたがたが黙々と二人の殉道者の感情に共鳴し、彼らの生命を守り、彼らの自由を勝ち取り、彼らの無罪を証明し、彼らの信仰を弁護したからである[68]。

巴金は「薩凡記念号」なる特集号をはじめ同誌に掲載された事件関連の文章にかくも積極的な評価を加えたが、彼の言う通り、その言葉には出典があった。一九二七年六月九日、巴金からの最初の手紙を受け取ったヴァンゼッティは巴金宛ての返信の冒頭において以下のように書いている。

> お手紙を受け取りました。とても感動しました。
> どうして私がすべての同志に宛てた手紙のなかで「沈黙する同志」に言及したか、君にはお分かりだろうか。それは、君のような多くの若者や年配の方々が、黙々と我々の感情に共鳴し、我々の生命を守り、我々の自由を勝ち取り、我々の無罪を証明し、我々の信仰を弁護したことを、私は知っているからである。〔……〕[69]

巴金は、ヴァンゼッティが彼を励まし勇気づけようとした言葉を以て、『革命』週報における事件の取り上げ方を評価したのである。これまで李石曽をはじめ、

畢修勺、『革命』週報に批判的な態度を貫いた巴金が、同誌の事件の取り上げ方に限って共感を寄せる背景には、いくつかの原因が存在すると考えられる。

先ずは外在的な要因として、『革命』週報の論調に変化が現れ始めたことが挙げられよう。坂井洋史の分析によれば、一九二七年九月に分共を果たした武漢政府が南京政府と合流し政局は一応の安定に向かうが、その情勢を反映してか、この時期の『革命』週報にはサッコ・ヴァンゼッティ事件の関連記事やクロポトキンの著作の翻訳が掲載されるようになった。また、第一六期から第一八期にかけて碧波「我們是誰？」が連載され、『革命』週報はアナーキズムの宣伝を主旨とする立場が打ち出されたという[70]。

「我們是誰？」とは、「アナーキズムとは何か」「『革命』週報の目的とは何か」「貴誌の言う社会革命は、国民革命と何が異なるのか」といった読者の疑問に応答すべく、畢修勺が社会革命の目的ならびにその方法を明らかにしようとした論文である。文末において、国民革命の目的は中国の民衆の自由と平等を実現することにあると言及する際、畢修勺は相変わらず、

> 三民主義のなかで最も重要且つ注目に値するのは、ほかならぬ民生主義である。〔……〕民生主義は、資本家が悪事の限りを尽くし、地主が凶暴且つ残忍であることに鑑みて、資本の節制、地権の平均化を救済の方法に掲げる。無政府共産主義も、資本家が悪事を働き、地主が凶暴であることを知っているが、農民と労働者が直接行動によって資本家と地主をやっつけ、激烈な革命によって資本制度と地主制度を覆す方法を採る。これが所謂方法の違いである。いずれが正しく、いずれが誤りなのか、その回答は将来を待つよりほかないだろう。我々は見通しが立たず、拠るべき事実を持たない時期にあって、できることなら互いに排斥し合うのではなく、寛大な胸襟と諒解の気持ちを持つべきである。私欲を満足させるためではなく前進するためなら、人々は手を携えればよいのであって、むやみやたらと互いに非難を加える必要はないではないか。〔……〕[71]

と述べており、国民党と手を携えて社会革命を遂げることを重視する、「告中国的社会革命者」以来の姿勢を崩すことはなかった。畢修勺のこのスタンスは、先に述べた君毅のそれと同じものであると見て差し支えないだろう。

しかしながら、それに先立つ発言のなかで、畢修勺は社会革命の目的とその方法について明快な議論を展開している。先ず社会革命の目的については、第

一に国家を消滅させること、第二に私有財産を廃止し共産社会を建設すること、第三に封建的な礼儀道徳や宗教的観念を打ち壊し自然的道徳を打ち立てること、この三点を挙げており、更にそれぞれについて詳細な説明を加えた。例えば、国家の消滅に関する箇所では、

> 国家（或いは政府）は人為的な組織であり、揺り籠から墓場まで、僅かな自由もないほど人間をきつく拘束する最上の権力を有する。法律などの類はすべて人間を拘束する道具であり、人間を戦争や納税のための生きた機械と見なし生殺与奪の権利を一手に収める、最も非人道的なものである。それゆえ、アナーキストはそれを根こそぎ取り除き、自由な契約社会を新たに組織しなければならない[72]。

と述べている。また、社会革命の方法については、第一に今日社会の暗黒面を暴き立て未来社会の理想像を描き出すよう、民衆のなかに入り宣伝活動に従事すること、第二に労働者と農民を鼓舞し、資本家や地主の生産制度に取って代わる労働組合や農民組合などの労農団体を組織させること、第三に抑圧と支配に甘んじてきた民衆の奴隷根性を叩き直し新しい価値観を身につけさせること、第四に新たな道徳や文化を形成すること、この四つの側面を挙げた[73]。

これらの議論を見ると、国民党元老派と関係を深め『革命』週報の主編を務めた畢修勺は、孫文の三民主義に共鳴し国民党の革命運動への参加を呼びかけ、国民政府という言わば権力組織の内部に身を置く人物であったとはいえ、彼は確かに、人間の自由と平等の実現を目標に掲げ国家、政府、法律の破壊を唱えるアナーキズム思想を堅持し、そのような姿勢から同誌の方向転換を図ろうとしたのである。二年後の一九二九年五月、巴金が「『革命』的性質」のなかで、『革命』週報の歩みを三つの段階に区分し「第二段階は『我們是誰？』が発表された以降に当たる。この時期の『革命』は明らかにアナーキズムの旗印を掲げていた」と述べたのも、民生主義を基調にアナーキズムを解釈するという第一段階の論調に明確な変化を見て取ったからであろう[74]。

『革命』週報の論調の変化とともに取り上げられたのがサッコ・ヴァンゼッティ事件であった。一九二七年九月の「薩凡記念号」なる特集号に掲載された文章や事件の関連記事は、第二章で概括的に紹介したように、サッコとヴァンゼッティの無罪を主張し、冤罪事件としての特質を暴き立て、死刑判決における人権侵害を批判すると同時に、寄稿者らがブルジョアや権力者の依拠す

る政府や法律を破壊し、搾取と抑圧に満ちた社会制度を根底から覆し、自由と平等に貫かれた社会を建設することを力説したものである。言い換えれば、この時期の『革命』週報の論調とサッコ・ヴァンゼッティ事件を契機に展開された議論は、ともにアナーキズムを標榜するものだったのである。それもそのはず、『革命』週報第一七期から第二〇期にかけて掲載された計十篇の文章のうち、編者、碧波、宗緑との筆名で書かれた五篇は畢修勺の手によるものであった[75]。

巴金が『革命』週報におけるサッコ・ヴァンゼッティ事件の取り上げ方に共鳴したのもこのことと無関係ではない。アナーキズムと現実問題を巡る衛恵林、巴金、君毅の思想的立場の違いを思い起こせば、巴金は、民衆における主体的な革命運動を指揮するためなら国民党の政治運動の内部に入り込み、権力者との癒着も辞さないという君毅の主張を批判する一方で、巴金自身は、国家の統一を目指す国民政府の北伐が軍閥や帝国主義の権力構造を破壊する性質を持つゆえ、これに賛同したのである。言い換えれば、巴金は、権力者に与しながらも権力組織の内部からそれを批判することに異議を唱えなかったのである。アナーキストとしては巴金は折衷主義的なスタンスに立っていたとはいえ、そのような姿勢が彼をして、畢修勺をはじめ『革命』週報に批判を加えさせつつも、同誌におけるサッコ・ヴァンゼッティ事件の取り上げ方にのみ共感を抱かせたのである。

おわりに

本稿では、巴金がサッコ・ヴァンゼッティ事件にいかなる関心を寄せたか、その関心が巴金のアナーキズム思想とどのように関わっているかについて考察した。もう一度整理すると、サッコとヴァンゼッティの両氏が死刑に処される以前には、連盟を主とする中国アナーキズム組織は正義と人道のもとで救援活動を展開し、両氏の無罪を主張した。しかし、両氏の死後には、連盟と『革命』週報は事件を契機にアナーキズムの宣伝活動に重きを置くようになり、連盟に至っては組織の勢力拡大を図ろうとした。当時フランス留学中であった巴金は、異国での暮らしのなかで強い疎外感に襲われたが、それを慰め取り除いたのがヴァンゼッティとの文通であった。そして、ヴァンゼッティの説くアナーキズム思想のなかに、巴金は組織化された民衆運動によって民衆の自由と解放の実現を図るというアナーキズムの理想を見出し、それに強く共感した。ところで、巴金は自らの革命思想を語るに当たって、権力者に与することを批判

しながらも、権力組織の内部に身を置きながら権力者を批判することに異議を唱えなかった。彼は国民党元老派であった李石曽、李が調達した資金で発行された『革命』週報、ならびに同誌の主編を務めた友人の畢修勺を批判したものの、同誌がアナーキズムの宣伝を趣旨とする方向へと明確に立場を変えていくなかでサッコ・ヴァンゼッティ事件を取り上げたことに強い共感を寄せた。国民党と結びついていたとはいえ、事件の関連記事が国家、政府、法律に批判の矛先を向けていたからである。このように見ると、ヴァンゼッティとの文通においても、『革命』週報における事件の取り上げ方に対する個人的な評価においても、巴金は自らのアナーキズム思想から出発していたことが明らかである。筆者は以前、巴金におけるサッコ・ヴァンゼッティ事件への関心の寄せ方を正義や人道の角度から評価したことがあるが、それも実際には人間に内在する倫理道徳に根差したものと言うより、アナーキズムという外在的な思想から生まれたものではなかったか。

その証拠として最後に一例を挙げよう。一九二七年十月、『平等』第一巻第四期に「薩珂与凡宰特専号」なる特集号が組まれた。それを繙くと、黒浪「法律下的大謀殺――薩珂与凡宰特被殺以後」（一－四頁）、佩竿「死者与生者（一）」（一一－一四頁）、「沙哥与凡宰特之死　The Death of Sacco and Vanzetti」（未署名、一四－一七頁）、「蔭珂与凡宰特致全体同志的信」（八頁）、「薩珂給他的児子但丁最後的一封信」（九頁）、「凡宰特致本社黒浪同志信―殉道者遺書之一」（九－一一頁）、計六篇の文章が掲載されており、そのすべてが巴金の手によって執筆、翻訳されたものである。ここに列挙した最初の三篇を見ると、「法律下的大謀殺」では両氏に死刑判決を下した政府と法律が批判されており、「死者与生者（一）」では一九二七年七月から八月にかけてフランスをはじめ世界各地で展開された抗議活動の様子が紹介されており、「沙哥与凡宰特之死」では主に死刑執行日のマデイロス、サッコ、ヴァンゼッティの様子が描かれている。それは決して、無実の罪を着せられ七年間もの間監獄生活を余儀なくされ、その果てに死刑に処されることがどれほど苦痛なものであったか、想像し表象を試みる内容ではない。ヴァンゼッティ自身、そのような苦痛をアナーキズムへの信奉によって乗り越えようとするきらいがあっただけに、専らアナーキズム思想の角度から事件に関わることこそヴァンゼッティの苦痛を救済する最上の方法であると巴金は感じていたのかもしれない。巴金は果たして、獄中生活を送るなかで囚人が覚える苦痛を、外在的な思想ではなく内在的な倫理道徳から想像し共感する力を持っていたのだろうか。巴金はこの時期に、

大正時代のアナーキストである古田大次郎（一九〇〇－一九二五）の『死の懺悔』（春秋社、東京、一九二六年六月）を読み感動したが、暗殺に散った青年の内面を巴金がどのように汲み取り評価したか、今後の課題としたい。

注記

1　その一例として以下のものが挙げられる。周立民『五四之子的世紀之旅：巴金評伝』（「世紀映像叢書」五四、秀威資訊科技股份有限公司、台北、二〇一一年五月）、七六－八〇頁。

2　山口守「巴金とサッコ＝ヴァンゼッティ事件」、『研究紀要』第四五期（日本大学人文科学研究所編、一九九三年三月）、九五－一〇八頁。

3　艾暁明「一九二七至一九三〇年巴金的思想発展――巴金是怎様走上文学道路的」、『文学評論叢刊』第一五輯（『文学評論』編輯部編、中国社会科学出版社、北京、一九八二年十一月）、四七－五二頁。

4　サッコ・ヴァンゼッティ事件の発生とその経過をまとめるに当たって、本稿では主に以下の資料を参考した。凡宰特「一個無産階級的生涯底故事」（芾甘訳）、『革命的先駆』（「自由叢書」第四種、自由叢書社編、上海自由書店、一九二八年五月）第一篇第八章（二四三－二八三頁）所収。守川正道『サッコ、ヴァンゼッティ事件――アメリカ民主主義の本質』（三一書房、東京、一九七七年一月）。小此木真三郎『フレームアップ―アメリカをゆるがした四大事件―』（「岩波新書」版、岩波書店、東京、一九八三年六月）第三章「『赤への恐怖』満ちる時代に　サッコ＝ヴァンゼッティ事件 ＝ 一九二〇」。

5　「ニユーヨーク市に　突発した爆弾騒動　無政府主義者の処刑事件から　ボルチモア市長邸は破壊され　死傷者廿二名出づ」、「各国に不穏の形勢　米大統領に寛大な処置を訴ふ」、『東京朝日新聞』、一九二七年八月八日、七面。

6　「各国に不穏の形勢　米大統領に寛大な処置を訴ふ」、『東京朝日新聞』、一九二七年八月八日、七面。「フランスでは　総罷業決行　例のヴアンゼツチ事件から　スウエーデンも騒ぐ」、『東京朝日新聞』（夕刊）、一九二七年八月九日、二面。「罷業参加者　七十五万と号す　ニユーヨーク労働者の　同情罷業決行さる」、『東京朝日新聞』（夕刊）、一九二七年八月十一日、一面。

7　「米大使館前で　決議文検束　築地小劇場の演説会から　押寄せた死刑反対連」、『東京朝日新聞』、一九二七年八月二十二日、七面。「サツコ死刑問題で　ゆふべ大演説会　国際弾圧防衛委員会が主催で　警官遂に抜剣し　検束者廿五名を出す」、『読売新聞』、一九二七年八月二十二日、二面。「日本に於ける抗議」、『弾道』八月号（弾道社、東京、一九三〇年八月七日）、一七頁。なお、演説会において可決された「死刑取消」の抗議書は、『弾道』八月号（一八－二〇頁）に掲載されている。

8　「ドイツでも騒ぐ　検束者百名を出す」、『東京朝日新聞』（夕刊）、一九二七年八月二十四日、一面。「ドイツの示威運動　四時間に亘つて乱闘　多数の死傷者と百名の検束者」、『東京日日新聞』（夕刊）、一九二七年八月二十四日、一面。

9　「死刑反対から　寿府に暴動　米人経営のホテル、商店　連盟本部も襲はる」、『東京朝日新聞』（夕刊）、一九二七年八月二十四日、一面。「ジユネーヴに果然　反米的

暴動起る　国際連盟本部を初め　米人経営の建物を襲撃」、『東京日日新聞』（夕刊）、一九二七年八月二十四日、一面。「死刑囚の救出で　寿府に排米暴動起る」、『読売新聞』、一九二七年八月二十四日、二面。

10　中国少年安那其主義者連盟書記部「沙樊事件与中国人」（一九二七年九月）、『薩樊事件』（剣波編、泰東図書局、上海、一九二八年八月）、一四三－一四四頁。

11　同上、一四六頁。

12　同上、一四五－一四六頁。

13　宗緑「轟動世界的凡薩案」、『革命』第一七期、『革命』合訂本第二冊（自由書店、上海、一九二七年八月）、二〇四－二〇八頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻（坂井洋史、嵯峨隆編、緑陰書房、東京、一九九四年四月）所収。

14　宗緑「裁判官賽葉竟敢殺薩凡耶？」、『革命』第一八期、『革命』合訂本第二冊、二三二－二三五頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

15　朋「薩各樊才第事件」、『現代評論』第一四〇期（一九二七年八月十三日）、三頁。

16　中国少年安那其主義者連盟書記部「沙樊事件与中国人」、『薩樊事件』、一四四頁。

17　宗緑「轟動世界的凡薩案」、『革命』第一七期、『革命』合訂本第二冊、二〇六頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

18　宗緑「裁判官賽葉竟敢殺薩凡耶？」、『革命』第一八期、『革命』合訂本第二冊、二三五頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

19　中国少年安那其主義者連盟書記部「沙樊事件与中国人」、『薩樊事件』、一四七－一四八頁。

20　同上、一四八－一四九頁。

21　編者「巻頭語」、『革命』第一九期、『革命』合訂本第二冊、二五七－二五八頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

22　碧波「哭薩哥凡齊蒂」（一九二七年八月二十八日）、『革命』第一九期、『革命』合訂本第二冊、二五八－二六〇頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

23　芾甘「死囚牢中的六年――薩珂（Sacco）与凡宰特（Vanzetti）果然会被殺麽――」、『民鐘』第二巻第六・七期（民鐘社、上海、一九二七年七月二十五日）、五二八－五四九頁。宗緑は「薩凡惨殺的前後」の冒頭において、事件の真相を中国の人々に紹介するため、敢えて芾甘「死囚牢中的六年」を「剽窃」したことを明言した注記を附している。なお、『民鐘』は一九二二年に広東新会で組織されたアナーキズム結社「民鐘社」の機関紙。一九二二年七月から一九二七年七月まで刊行された。

24　宗緑「薩凡惨殺的前後」、『革命』第一九期、『革命』合訂本第二冊、二六〇－二八五頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

25　天工「薩凡死後的感想」、『革命』第一九期、『革命』合訂本第二冊、二八五－二八六頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。

26　熙寿「為薩凡之死敬告中国農工階級」（一九二七年九月一日）、『革命』第二〇期、『革命』合訂本第二冊、三〇〇－三〇二頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。なお、寄稿が遅れたことについては文章冒頭に附された注記のなかで説明されている。

27　巴金「巴黎」、『海行』（「新中国文芸叢書」、新中国書局、上海、一九三二年十二月）、一〇一－一〇二頁。

28　巴金「我底眼涙」、『文芸月刊』第二巻第一〇期（一九三一年十月）、『光明』（「新中国文芸叢書」、新中国書局、上海、一九三二年五月）、一四二－一四六頁。

29 巴金「法文訳本序」(一九七七年九月二十六日)、『家』(『巴金全集』第一巻〔人民文学出版社、北京、一九八六年十一月〕)、四五八頁。
30 巴金がこのときに接した記事は、芾甘「死囚牢中的六年――薩珂(Sacco)与凡宰特(Vanzetti)果然会被殺麽――」(『民鐘』第二巻第六・七期、五四一－五四二頁、『巴金全集』第二一巻〔人民文学出版社、北京、一九九三年四月〕、一八八－一八九頁)に引用されている。記事の内容は、残酷な死刑を批判し両氏の無罪を強調したものである。
31 Bartolomeo Vanzetti : *The Story of a Proletarian Life*, Boston : Sacco-Vanzetti Defense Committee 1923. なお、巴金による同書の中国語訳は以下の通り。凡宰特「一個無産階級的生涯底故事」(芾甘訳)、『革命的先駆』(「自由叢書」第四種、自由叢書社編、上海自由書店、一九二八年五月)第一篇第八章(二四三－二八三頁)所収。凡宰特『一個売魚者的生涯』(「自由小叢書」第一種、芾甘訳、上海自由書店、一九二八年十二月)。凡宰特「一個無産階級的生涯底故事」、芾甘『断頭台上』(「時代叢書」第一種、上海自由書店、一九二九年一月、二四三－二八二頁)所収。凡宰特『我的生活故事』(芾甘訳、文化生活出版社、上海、一九三〇年九月初版、一九四七年十月再版)。凡宰特『一個無産者的故事』(巴金訳、平明書店、上海、一九三九年)。
32 巴金「我底眼涙」、『光明』、一四六－一四七頁。
33 同上、一五一頁。
34 凡宰特「一個無産階級的生涯底故事」(芾甘訳)、『革命的先駆』、二七一－二七二頁。
35 巴金「我底眼涙」、『光明』、一五一頁。
36 巴金「我底眼涙」の結末には、サッコとヴァンゼッティが死刑に処された直後、友人「A」と友人「C」がアメリカ領事館の前でデモ行進を行なったことが記されている(『光明』、一六一－一六三頁)。なお、友人「A」は呉克剛、友人「C」は衛恵林を指す。
37 *Freedom : A Journal of Anarchist Socialism*, Vol. XII No. 445, 1927, Sep. – Oct. *Resistance*, Vol. 7 No. 2, 1948, Jul. – Aug.
38 「凡宰特致本社黒浪同志信―殉道者遺書之一」、『平等』第一巻第四期「薩珂与凡宰特専号」(平社、サンフランシスコ、一九二七年十月)、一〇－一一頁、『中国現代文学研究叢刊』一九九六年第二期、二二三－二二四頁。
39 巴金「我底眼涙」、『光明』、一五三頁。
40 *The Letters of Sacco and Vanzetti*, Edited by Marion D. Frankfurter and Gardner Jackson, London : Constable 1929. pp. 307-310.
41 Ibid., pp. 308-309. 和訳するに当たって、「一九二七年七月二十三日凡宰特致巴金的信」(李今訳、『中国現代文学研究叢刊』一九九六年第二期、二三〇－二三一頁)を参照した。
42 この二通の書簡はいずれも、Boston Public Library所蔵。『中国現代文学研究叢刊』一九九八年第二期、二－四、五－七頁参照。
43 同上、三頁。
44 恵林、芾甘、君毅『無政府主義与実際問題』(民鐘社、上海、一九二七年四月)、『無政府主義思想資料選(上、下冊)』(「高等学校教学参考書」、葛懋春、蒋俊、李興芝編、北京大学出版社、一九八四年五月)、八二六－八四九頁。本書は恵林が第一節、芾甘が第二節、君毅が第三節を担当している。なお、君毅とは呉克剛のことである。
45 芾甘「答誣我者書」(一九二八年四月三日)、『平等』第一巻第十期(平社、サンフランシスコ、一九二八年五月)、『巴金全集』第一八巻(人民文学出版社、北京、一九九三年

十二月)、一七六－一七七頁。

46　恵林、芾甘、君毅『無政府主義与実際問題』、『無政府主義思想資料選（上、下冊)』、八二八－八二九頁。

47　同上、八二七頁。

48　同上、八二八頁。

49　同上、八四〇－八四一頁。

50　同上、八三九頁。

51　同上、八四七頁。

52　同上、八四八頁。

53　同上、八三三頁。

54　巴金は、彼が最も早く発表したアナーキズム関連の言論とされる「怎様建設真正自由平等的社会」(『半月』第一七号、半月社、成都、一九二一年四月）のなかで、「政府も法律も存在しないことこそ本当の自由であり、ブルジョアが存在しないことこそ本当の平等である」(『巴金全集』第一八巻、二頁）と述べている。また、「愛国主義与中国人到幸福的路」(『警群』第一号、一九二一年九月）においても、権勢の拡張と他国への侵略を正当化する愛国主義を批判したうえで、中国の民衆が幸福を手にするためには、民衆への抑圧を強化する政府、支配の構造を保障する法律、公有財産を略奪して築かれる私産、自由な思想を束縛し神への盲信を強いる宗教、これらを悉く破壊しなければならないと強調した（『巴金全集』第一八巻、一四－一七頁)。

55　恵林、芾甘、君毅『無政府主義与実際問題』、『無政府主義思想資料選（上、下冊)』、八三六－八三七頁。

56　同上、八三八頁。

57　同上、八三三頁。

58　畢修勺「我信仰無政府主義的前前後後」(一九八二年五月)、『無政府主義思想資料選（上、下冊)』、一〇三〇－一〇三一頁。

59　呉相湘「易培基与故宮盗宝案」、『民国百人伝』第三冊、(「伝記文学叢刊」一八、伝記文学出版社、台北、一九七一年一月)、二二〇頁。

60　呉稚暉「弁陳公博之誣致民国日報書」、『呉稚暉先生文粋（一)』(「中華文史叢書」四〇、華文書局、台湾、一九二九年)、一五四頁。

61　碧波「告中国的社会革命者」、『革命』第六期、『革命』合訂本第一冊（自由書店、上海、一九二七年七月)、一七四－一七六頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第一巻（坂井洋史、嵯峨隆編、緑陰書房、東京、一九九四年四月）所収。

62　坂井洋史「第一～第六巻解題」(二)「《革命週報》の内容と傾向」、『原典　中国アナキズム史料集成』別冊（坂井洋史、嵯峨隆編、緑陰書房、東京、一九九四年四月)、一八頁。

63　畢修勺「我信仰無政府主義的前前後後」、『無政府主義思想資料選（上、下冊)』、一〇三一－一〇三二頁。

64　呉念聖編「畢修勺年譜」、『講真話――巴金研究集刊巻七』(陳思和、李存光主編、上海三聯書店、二〇一二年八月)、四一八頁。

65　芾甘「寄革命週報編者的信」(十一月五日)、『革命』第三四期、『革命』合訂本第四冊（自由書店、上海、一九二八年三月)、一二一頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第四巻（坂井洋史、嵯峨隆編、緑陰書房、東京、一九九四年四月）所収。

66 黒浪「空前絶後的妙文」、『平等』第一巻第二期（平社、サンフランシスコ、一九二七年八月）、『巴金全集』第一八巻、一三三頁。
67 嵯峨隆「第一～第六巻解題」（三）「《革命週報》と李石曽」、『原典　中国アナキズム史料集成』別冊、二八－三〇頁。
68 芾甘「寄革命週報編者的信」、『革命』第三四期、『革命』合訂本第四冊、一二一頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第四巻所収。
69 「凡宰特致本社黒浪同志信―殉道者遺書之一」、『平等』第一巻第四期「薩珂与凡宰特専号」、九頁、『中国現代文学研究叢刊』一九九六年第二期、二二三頁。
70 坂井洋史「第一～第六巻解題」（二）「《革命週報》の内容と傾向」、『原典　中国アナキズム史料集成』別冊、一八頁。
71 碧波「我們是誰？（続）」、『革命』第一八期、『革命』合訂本第二冊、二三〇頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。
72 碧波「我們是誰？」、『革命』第一六期、『革命』合訂本第二冊、一七三頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。
73 碧波「我們是誰？（続）」、『革命』第一七期、『革命』合訂本第二冊、一九九－二〇〇頁。『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。
74 春風「『革命』的性質」、『平等』第二巻第四・五期（平社、サンフランシスコ、一九二九年五月）、『巴金全集』第一八巻、二二九－二三〇頁。
75 十篇の文章は以下の通り。宗緑「轟動世界的凡薩案」（第一七期）。宗緑「裁判官賽葉竟敢殺薩凡耶？」（第一八期）。編者「卷頭語」、碧波「哭薩哥凡齊蒂」、宗緑「薩凡慘殺的前後」、天工「薩凡死後的感想」、愛娜「薩凡之死」（以上、第一九期）。熙寿「為薩凡之死敬告中国農工階級」、日本同志「追悼薩凡二同志」、平林「黒雲片片飛」（以上、第二〇期）。『革命』合訂本第二冊参照、『原典　中国アナキズム史料集成』第二巻所収。